



第14回

川に学ぶ体験活動全国大会 in 五ヶ瀬川

テーマ 「伝統的な川文化」を継承する体験活動



大会趣旨／大会組織	3
大会日程	4
オープニング・セレモニー	6
1日目 開会式	7
基調講演	13
活動報告	27
パネルディスカッション	36
交流会	47
2日目 分科会	49
全体会	64
閉会式	69
エクスカーショ	71
資料 総括	78
実行委員会・運営委員会・事務局・運営スタッフ	82
協賛者一覧	84

宮崎県北部を流れる一級河川五ヶ瀬川は九州中央山地に位置する五ヶ瀬町を源流として、東に流れ延岡市に注ぎます。良質で豊富な水により、旭化成の工場が立地し、工業用水や発電にも使われています。平成9年、17年の激特事業を経てもなお自然豊かな環境が保持され、魚だけでなく貴重植物や昆虫などの多様な生き物にあふれています。

また、今でも秋の風物詩として300年間続く『伝統鮎やな』が掛かり、やな場（食事処）で落ち鮎を食させており、環境省『日本のかおり風景100選』にも選定されています。支流の北川では、竹柴を水面ぎりぎりに張って緑色に反応する鮎が反転して溜まるのを待って刺し網で取る『柴堰』や『チョン掛け』、『ころばし』など、さまざまな漁法も伝承されています。洪水の常襲地でもあり、霞堤や、輪中堤、豊堤などの治水施設も継承されています。このように五ヶ瀬川はこの流域の社会、経済、文化の基盤を成しています。

五ヶ瀬川は水質日本一の名に恥じない、とても良い川です。そんな川の素晴らしさを、さらに沢山の方との関わりの中で、未来に継承していくための大会にしたいと考えております。

- 主催 第14回川に学ぶ体験活動全国大会 in 五ヶ瀬川実行委員会
- 共催 NPO 法人 川に学ぶ体験活動協議会（通称：RAC）
- 特別協賛 公益財団法人 みやざき観光コンベンション協会

後援 国土交通省／文部科学省／環境省／宮崎県／延岡市／延岡市教育委員会／公益財団法人 河川財団／子どもの水辺サポートセンター／公益社団法人 日本河川協会／公益財団法人 リバーフロント研究所／一般財団法人 河川情報センター／NPO 法人 自然体験活動推進協議会／一般社団法人 九州地域づくり協会／NHK 宮崎放送局／MRT 宮崎放送／UMK テレビ宮崎／ケーブルメディアワイワイ／宮崎日日新聞社／夕刊デイリー新聞社

大会日程

第1日目 9月20日(土)

12:00 受付

会場：カルチャープラザのべおか 1F 多目的ホール

12:30 オープニング・セレモニー

東海東小学校 4 年生による「權伝馬踊り」

13:00 開会式

開会挨拶

主催者挨拶 土井 裕子（第14回川に学ぶ体験活動全国大会 in 五ヶ瀬川 実行委員長）
藤吉 洋一郎（NPO 法人 川に学ぶ体験活動協議会 代表理事）
代理：藤芳 素生（NPO 法人 川に学ぶ体験活動協議会 副代表理事）

祝辞 金尾 健司（国土交通省 九州地方整備局長）

河野 俊嗣（宮崎県知事）代理：内田 欽也（宮崎県副知事）

歓迎挨拶 首藤 正治（延岡市長）

13:30 基調講演

演題 「流域と日本人のアイデンティティー」

講師 竹村 公太郎 氏（NPO 法人 日本水フォーラム 事務局長）

14:40 活動報告

地元活動事例報告 1. リバーフェスタのべおか実行委員会 2. 宮崎県立延岡工業高校土木科
3. 天下一五ヶ瀬かわまち創ろう会 4. NPO 法人 白川流域リバーネットワーク
全国活動事例報告 5. 青森県 小川原湖自然楽 6. 新潟県 見附市 7. 東京都 大田区立嶺町小学校

15:55 パネルディスカッション

テーマ 「伝統的な川文化」を継承する体験活動

パネリスト 三橋 さゆり 氏（国土交通省 河川環境課 河川環境評価分析官）
名和 あけみ 氏（NPO 法人 長良川環境レンジャー協会理事）
杉尾 哲 氏（NPO 法人 大淀川流域ネットワーク代表理事）
首藤 正治 氏（延岡市長）

アドバイザー 竹村 公太郎 氏（NPO 法人 日本水フォーラム事務局長）

コーディネーター 土井 裕子（第14回川に学ぶ体験活動全国大会 in 五ヶ瀬川実行委員長）

18:30 交流会

会場：ホテル メリージュ延岡

第2日目 9月21日(日)

8:45 開会

会場：カルチャープラザのべおか 1F 多目的ホール

開会挨拶 藤芳 素生（NPO 法人 川に学ぶ体験活動協議会 副代表理事）

9:00 分科会

会場：社会教育センター

第1分科会 「川あそびのススメ」～川と教育（2F__研修室 6）

第2分科会 「川の文化と継承」～未来に残す川づくり（2F__研修室 2）

第3分科会 「川とまちづくり」～川を活かす可能性（2F__研修室 3）

第4分科会 「川と防災」～水防災と地域力（2F__研修室 5）

10:40 分科会報告、全体会

コーディネーター 平山 康弘（NPO 法人 川に学ぶ体験活動協議会理事）

12:35 閉会式

閉会挨拶 杉尾 哲（第14回川に学ぶ体験活動全国大会 in 五ヶ瀬川 副実行委員長）

12:40 エクスカーション

五ヶ瀬川__E ボート

清流 北川__鮎のチョン掛け体験

五ヶ瀬川河川文化施設__見学バスツアー

第3日目 9月22日(月)

9:00 特別エクスカーション

神話の里高千穂__見学バスツアー

オープニング・セレモニー

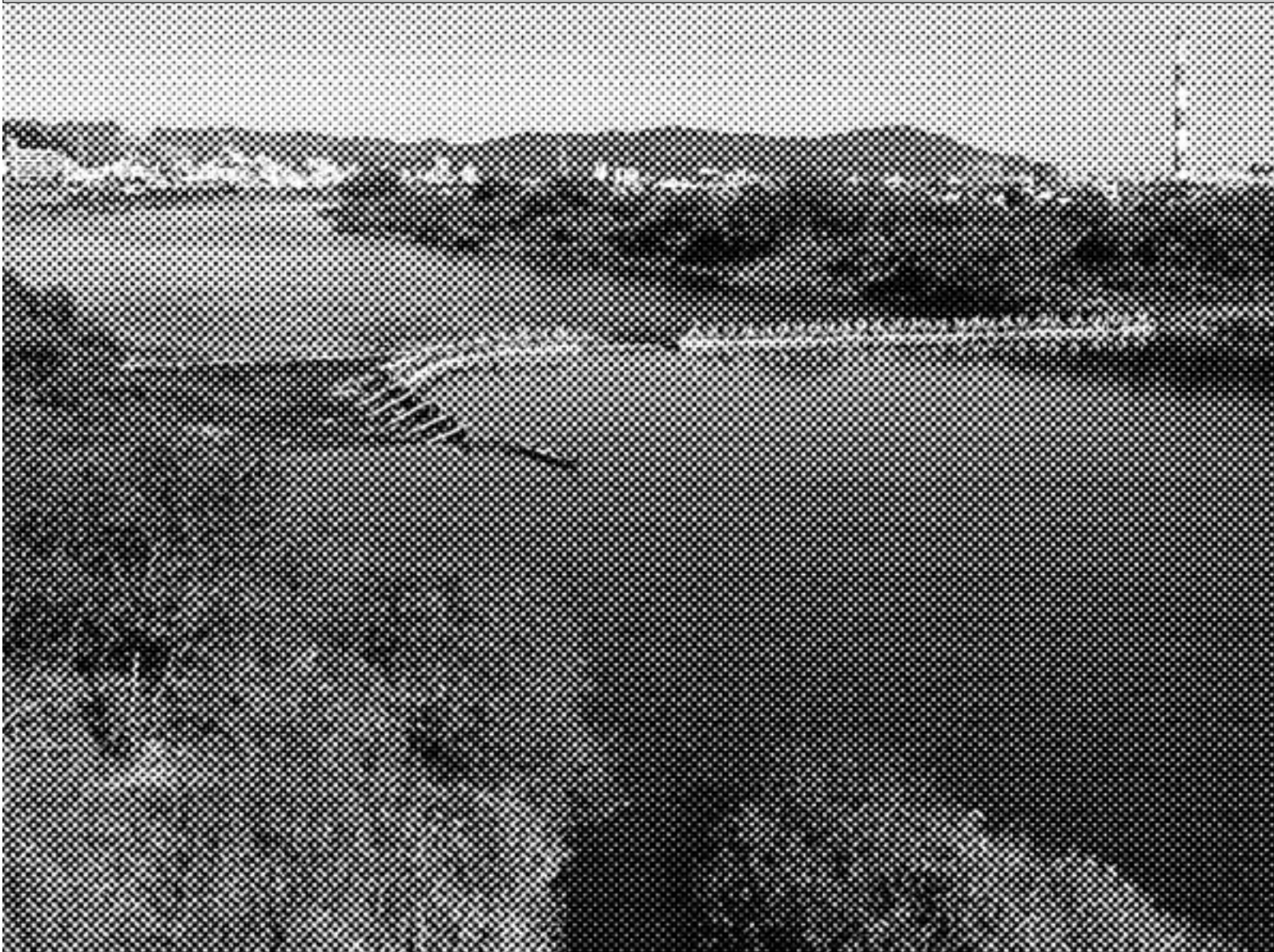
東海東小学校 4 年生による
「權伝馬踊り」



第1日目
9月20日(土)

会場
カルチャープラザのべおか
1F 多目的ホール

開 会 式



主催者挨拶

第14回 川に学ぶ体験活動全国大会 in 五ヶ瀬川 実行委員長
土井 裕子



皆様こんにちは。

本日はご来賓を始め、全国各地から沢山の皆様にお越し頂き、「川に学ぶ体験活動協議会」の全国大会を、この延岡の地で開催できますこと、大変感慨深く思っております。

と言いますのは、12年前、この会がスタートしたばかりの時に、川遊びを指導するリーダーを養成するための、トレーナーの講習会が初めて、延岡の五ヶ瀬川をフィールドに開催されました。それには全国からトレーナーに推薦された人々が30名ほど集まりまして、行滕少年自然の家で5泊6日の研修、さらに3月なのに川でのレスキュー訓練もするという大変苛酷な研修の上で承認されました。

延岡からは5名ほどが推薦を受け、トレーナーの研修ですので参加者も何らかの授業を受け持つということで、私共は後ほど活動事例発表を行います「リバーフェスタのべおか」で開発された「Dボートレースという段ボールで舟を作ってレースをするという体験を持ち込み指導しました。実はその研修会には今日、ご参加頂いている九州地方整備局の金尾局長も参加されて、研修を受けられました。

その折にはこの組織が今後どうなっていくのか漠然とした感じだったのですが、この12年間で、この「川に学ぶ体験活動協議会」も大変充実して参りましたし、川を取り巻く環境も変わって参りました。

私の子ども時代、黄金の夏休みは川抜きには語れないほど川に浸る暮らしをしておりましたが、「よい子は川で遊ばない」の30年を経て今、川と親しむ暮

らしを取り戻そう、もっと自然豊かな川を作ろう、まちづくりの中にもっと積極的に川を取り込もうという活動が、全国で広がってきています。

それだけでなく、ゲリラ豪雨に代表される気候の変化から、災害対策や防災という視点も大事になって参りました。

本日はそんなさまざまな活動を、実際に全国各地で実践している方々が沢山集まっていたいておりまして、地元からも、今進めている取り組みについて発表することになっております。

この機会に、お集まりの皆様が川の可能性について様々な感じていただき、かつての「水郷のべおか」の現代版を沢山の皆様に参加いただきながら、作っていったらと願っております。

大変にスケジュールの詰まった2日間ですが、皆様が多くの体験や思いを共有し、今後の日本の川づくりに繋がられますよう祈念いたしましてご挨拶とさせていただきます。この2日間、どうぞよろしくお願い致します。



主催者挨拶

RAC 副代表理事
藤芳 素生



みなさんこんにちは。本日は、第14回川に学ぶ体験活動全国大会 in 延岡、五ヶ瀬川が開催されるに当たって、国交省本省から三橋分析官、九州地方整備局から金尾局長、宮崎県から内田副知事、延岡市のお首藤市長をはじめ、行政の方々にも沢山ご参加頂いております。

思い返すと、平成9年に河川法が改正されて、これからは治水・利水に加えて、環境も一緒にやっという時代になりました。その中でもう一つ、川での機能・活動を市民に取り戻そうと市民参加が打ち出されました。その後、河川審議会の中に「川に学ぶ小委員会」がつくられ、どのように活動していくかの答申が出されました。

それを受けて、平成12年に「川に学ぶ体験活動協議会(RAC)」が発足したわけです。平成13年には第1回の全国大会が岡山で開催されました。本日は14回目ということですが、初めの頃、私も金尾さんと一緒に参加した思い出がございます。川に対する理念、川での学び、河川環境の保全とか防災とかを考えて行く理念をどうするか。実際の行動に当たっては、市民が日頃から川と付き合っというくには、川で安全に活動する指導者(リーダー)が必要であろうということで、RACの一番の目的はリーダーの育成になっています。現在リーダーは、4000名を数えることとなりました。指導者を育成するトレーナーをはじめとして、川のリーダー・学校リーダーによって川の活動が支えられています。

最初、指導者の養成をする団体は発足時はわず

か12団体でした。もちろん今回の主催者であります「五ヶ瀬川流域ネットワーク」も最初の団体の一つです。現在では120団体のネットワークで、行政とも一体となって活動をやっというこうとということになっています。

一時しばらく、行政との仲が離れた時期もございましたが、昨年、河川法の一部改正がございまして河川法の中で「河川協力団体」というものが創設されました。市民サイドからも、協力団体として、一緒に、防災、河川環境、清掃も含め様々な場で、また行政とも手を携えて、一緒に活動に取り組んで行こうということになりました。

RACの加盟団体も河川協力団体として、一生懸命やっというところですが、今年も水難事故がたくさんありました。川で安全に楽しく活動するには、自分の命もしっかり、子ども達の命もしっかり、守る必要があります。その意味でもライフジャケットの着用を進めて行くことも大切です。

今回のメインテーマは「伝統的な川文化を継承する体験活動」ということになっております。延岡は日本文化発祥の地と言っても不思議ではない、日本の神話のふるさとでございます。そのような地で、もう一度「川に学ぶ」という基本理念に立ち返って、今日ご参加の皆様と一緒に議論出来ることを非常に嬉しく思っております。

本日は「日本水フォーラム」の竹村公太郎さんから「河川文化」についてご講演頂きます。河川文化は水と土地、これに関わって我々は河川文化を発展させてきたわけです。またそこに立ち返って、そこを基調に今日の話し合いが出来ればと思っています。

今回の全国大会開催に向けてご尽力頂いた実行委員、運営委員の皆様にご感謝申し上げますとともに、2日間楽しく学ぶこと、よろしくお願い致します。

祝辞

国土交通省 九州地方整備局長
金尾 健司



皆さんこんにちは。ご紹介いただきました九州地方整備局の金尾でございます。まずは第14回RACの全国大会が、五ヶ瀬川、北川という大変美しい流れに恵まれた延岡の土地でこのように多くの方々の参加を得て、開催されますことに対しまして、まず心からお喜び申し上げたいと思います。

また、日頃から国土交通省、九州地方整備局が進めております河川環境行政につきまして、皆様方から多大なご協力、ご支援を賜っておりますことを、厚くお礼を申し上げたいと思います。

先ほど藤芳副代表からもお話がありましたが、河川環境行政の一環として、「川に学ぶ社会の実現」これが平成9年の河川法改正でありまして、その翌年の平成10年、河川審議会の中に「川に学ぶ小委員会」が設置され議論されました。様々な事が提言されているわけですが、その中で実現方策の一つとして、このような、体験活動をする団体が必要であると言うことで、平成12年に市民主導の基、RACが立ち上がりました。当時、私は河川環境課におりまして、この団体のさまざまな活動にも関わらせて頂きました。

第1回の全国大会が岡山、第2回が北九州、第3回は徳島でした。そこまでは関わらせて頂いておりました。その後、少し担当を外れていましたが、最近では鶴見川の大会、中津川の大会と、これでかれこれ6回くらいは携わっております。設立当時から関わらせて頂いておりますので、感じますのは、さまざま問題を抱えながらも、活動がいよいよ地に足が着いてきたなあという印象を持っております。

一方で、先ほども話がありましたように、平成11年の神奈川県黒倉川では、大変痛ましい水難事故がありまして、その後も神戸の利賀川で水難事故がございました。今年は岩手では筏下りをしていた保育園の児童がお亡くなりになったという事故もございまして、まだまだ川での活動で安全意識というものが遅れているなあと思っております。

そういう意味で、ますますRACは存在意義を増し、活動はますます重要になってくると思っております。

河川法改正で「河川協力団体」というのが設置されました。これからは私共行政サイドも、皆様とのパートナーシップを益々強めて河川環境行政を進めて参りたいと思っております。

最後に、土井委員長を初めとする、この全国大会実現にご尽力いただきました関係者の皆様に敬意を表しましてご挨拶と致します。

祝辞

宮崎県知事(河野俊嗣氏)代理・宮崎県副知事
内田 欽也



皆様こんにちは。ただいまご紹介いただきました副知事の内田でございます。本日は第14回の大会がこのように盛大に開催されますこと、まず心からお慶び申し上げます。

また本日は全国各地から、ここ延岡へお越しいただいたと聞いております。宮崎によろこそお越し下さいました。心から歓迎申し上げます。特に青森県、新潟県、東京都からご参加の皆様からは、取り組みのご紹介を頂けるとのこと、大変楽しみにして参りました。

先ほど少しご紹介がありましたが、宮崎は神話のふるさとと我々呼んでおりますが、有名な高千穂はここから1時間の所でございますし、延岡市内にも日本武尊ゆかりの行滕山、行滕神社もございます。少し南に行きますと神武天皇がお船出をしたと言われている場所もあり、神話に由来のある場所が沢山あります。是非お時間がありましたらそのような場所で、宮崎の文化、自然にも触れていただければ幸いです。

さて、今回は、知事、河野にご案内を頂いたのですが、あいにく、他の公務で参れませんでした。先ほどの東海東小学校の生徒さんの踊り、知事も見たかったのではないかと思います。拝見していたのですが、ここで知事の祝辞を代読させていただきます。

本日全国各地より多くの皆様のご参加を得て第14回川に学ぶ体験活動全国大会 in 五ヶ瀬川が、盛大に開催されますこと心からお喜び申し上げます。

また「NPO 法人川に学ぶ体験活動協議会」を初め、お集まりの皆様には、日頃から様々な活動を通じて

豊かな人間性の育成や川文化の創造などにご貢献いただいております。深く敬意を表す次第であります。

さて、本県は西にそびえる九州山地を水源に多くの河川が太平洋に注いでおり、それらの良質で豊富な水資源は、私たちの生活にうるおいをもたらすと共に、様々な産業に利用されるなど、県民にとってかけがえない財産となっております。またこれらの河川は多種多様な生物が生息するなど、素晴らしい自然環境を有しており、地域の方々の癒しや憩いの場として、親しまれている所でもあります。

本県においては、その素晴らしいさを次世代に繋げられるよう、自然の営みと治水対策の調和を図る多自然川づくりや県民の皆様との協働による環境保全等に積極的に取り組んでいるところです。

ここ地元延岡市を流れます五ヶ瀬川は、本県を代表する河川の一つであり、住民の皆さんによる魅力あふれる活動が、各地で展開されておまして、この五ヶ瀬川において全国の河川を愛する皆様が集まり、交流が深められることは誠に意義深い物と、感じているところでございます。

さらに折しも今年は、宮崎市から延岡市までが、ついに一本の高速道路で結ばれるという宮崎県民の永年の悲願が実現した年でありまして、そのような歴史的な節目の年に、延岡市にてこの全国大会が開催されます事大変喜ばしく感じているところです。

皆様におかれましては、五ヶ瀬川の特徴を活かした様々な体験や交流会を通じて、本県河川の素晴らしいさを知っていただくと共に、宮崎の豊かな自然がはぐくんだ食や文化などを、堪能していただければ幸いです。

最後に、今大会を契機に全国の川に学ぶ体験活動がより一層充実すると共に、お集まりいただきました皆様方の、益々のご活躍とご健勝を心より祈念いたしましてお祝いの言葉とさせていただきます。

本日は誠にありがとうございます。

延岡市長
首藤 正治



みなさんこんにちは。地元市長の首藤でございます。本日は、第14回 RAC の全国大会の開催、誠にありがとうございます。市外、県外から沢山の方にお越し頂いております。この水郷延岡によろそおいで下さいました。心から歓迎申し上げます。

延岡は、古くから「水郷」と言われ続けて来ており、今の時代においても、この川の美しさがずっと引き継がれてきております。もちろん多くの方々の努力のたまものとして、今のこの五ヶ瀬川があるわけですが、現在も五ヶ瀬川の水質は、全国でトップクラスです。国交省が管轄されている河川の中で、全国最高ランクの水質を誇る10河川の一つで、これは私どもにとって大きな誇りであり、それを今後もしっかり活かしていきたいと思っております。

来月には300年以上の歴史を持つ「鮎やな」も架かります。おそらく全国でもこれだけの規模の鮎やなは無いだろうと思っております。そして大変素晴らしいのは、工業都市として発展してきた延岡の、街中に程近い所にこれだけの規模の鮎やなが架かっていて、それを市民や他所からお見えのお客様が、舌鼓を打って楽しんでいただける。こういう姿は大変に素晴らしいなと思っております。

水郷延岡、プラスの面をとらえて話しておりますが、古来、延岡にも沢山の水害がありました。今の時代においても、まだまだ川は怖さを秘めております。その怖さをしっかり知りつつ、意識の中にもおきつつ、しかした怖い物として決めつけてしまうのではなくて、それをしっかり私達の生活の中に活かして親しんでい

くことが、非常に重要な時代になってきたなと、あらためて思っております。

延岡は今、副知事から紹介がありましたように、長らく高速道路がありませんでした。陸の孤島と揶揄されてきた時代が随分長く続いてきました。高速道路の開通は延岡市民、県民の悲願として言い続けて来たわけですが、ようやくその悲願が今、叶おうとしております。今年の春には延岡から宮崎市まで、来年には大分まで全線が開通します。今までは交通の便が悪かったから発展が難しかったと言われてましたが、今後はそれを言い訳に使うわけにはいかなくなります。

これからは環境が大きく変わります。道路の発展を上手く使うことで、街の発展に是非繋げて行きたいと思っております。その、発展に繋げる資産や財産が沢山ありますけれど、その財産の大きな物の一つが河川であろうと思っております。まず延岡市民が自分達で川に親しんで、その良さを知って生活に活かして行く事を進めて、またそういう情報を発信することで、市外、県外の沢山のお客様に来ていただける、そんなまちづくりが出来たらと思っております。

この第14回大会で沢山の情報交換をして頂きながら、日本における河川の活かし方を、色々考えて頂き皆様のアイディアと延岡の将来を、上手く重ね合わせていければと思っております。

この大会の成果が実り多き物になりますよう心からご祈念申し上げ、ご参加の皆様のご健勝も合わせてご祈念申し上げ、歓迎の挨拶とさせていただきます。

本日はよろそお越し頂きました。ありがとうございます。

基調講演



NPO法人 日本水フォーラム 事務局長
竹村 公太郎 氏



竹村 公太郎

1970 年東北大学大学院土木工学修士課程修了、同年、建設省入省。2002 年国土交通省河川局長を最後に退官。2004 年リバーフロント整備センター理事長。2014 年同研究参与。2006 年日本水フォーラム代表理事・事務局長。
著書に「日本文明の謎を解く」（清流出版 2003 年）、「土地の文明」（PHP 研究所 2005 年）、「幸運な文明」（PHP 研究所 2007 年）、「本質を見抜く力（養老孟司氏対談）」（PHP 新書 2008 年）「歴史の謎は『地形』で解ける」（PHP 文庫 2013 年）など。

こんにちは、日本水フォーラム事務局長の竹村と申します。

本日は RAC の全国大会で貴重な時間を頂き、有難うございます。この限られた時間で、流域に住む皆様と、日本人のアイデンティティ、近代、ポスト近代について、川を巡って皆様と理解を深めたいと思っています。

川の近代（今）を語るには、江戸時代を語らないと始まりません。実は九州内で、九州地方整備局が作った堤防はほとんど無いんです。強化した堤防は沢山あります。今、形になっている堤防は、ほとんど江戸時代に出来たんです。ですから今の川の姿を考えるには、江戸時代から始めざるをえないんです。



日本の川の流域図



徳川家康はいかにして全国を治めたか？世界中でもきわめて珍しい、幕藩封建体制を整えました。関ヶ原が 1600 年に終わって、徳川家康はこの日本列島の中に 300 諸侯をどう納めるか、工夫をしました。それは地形を利用したんです。山脈があって川があって海峡がある、このやっかいな日本列島の中に 300 諸侯をどうやって納めたか。この絵のこれは箱根です。大名行列があって、これが由比の峠、ここが東海道の、人が歩いています。東海道はそんな立派な街道では無く、獣道だったんです。世界の中でこんなに地形で分断された国家は無いんです。これは珍しくて、全国の川の流域の図面です。家康は、大名を川の流域に押し込めたんです。

戦国時代は各藩は、尾根を超えて戦っていたんですが、家康は、「おまえたちに流域に領地を与える、尾根からは絶対に超えてはいけない」ということを約束させたんです。大名たちは流域の中に納まり、絶対的な権力を得たのです。流域に権力が閉じ込められた、流域封建制度です。

この中で 250 年間の平和な時代を過ごしていた。もちろん大きな川には、上流から下流、違う藩もありました。でも尾根さえ超えなければ、その中で何をやっても良い。お城を作ることには許可がいましたが、干拓や河川改修は自由にやって良い。流域の中で豊かになることであれば何でもやって良かったのです。これが実は江戸時代の幕藩封建体制です。



九州は、流域がモザイクのようにきれいに重なった地域です。関東や関西は大きな川の中にいくつかの藩が混在して、やっかいな場所でした。九州でも大分だけは、狭い川の途中に小さな藩が何藩もありました。
基本的には、この流域の中に封じられた権力が、250 年間の日本の文化の原点です。膨張しない、戦争しない江戸時代、皆のエネルギーは国土開発に向かっていきました。



那賀川 河川管内図 (出典：四国地方整備整備局 那賀川河川事務所)

これは四国整備局が作った那賀川の地図です。すべての国土交通省の事務所がこんな図面を作っていますが、那賀川工事事務所は、一皮剥いた図面も作ったんです。これがこの川の下姿です。川の下に大蛇が住んでいます。これは若い人には理解できないでしょうが、当たり前なんです。

川が山から流れてきて、溢れてあちこに暴れまくっていた。それを江戸時代の人々は、堤防を作って川を堤防の中に閉じ込めて行きました。その中に水田をつくり、稲作をして、土地利用を豊かにしてきたんです。人々のエネルギーは、250 年間、外に向かわず、自分

たちの領土をどう有効活用するか、そこに向けられて来ました。これは大変な蓄積です。だから冒頭、申しましたように日本の川で明治政府が作った川は、荒川放水路などわずかで、ほとんどの川は、江戸時代の祖先が作った川の堤防を高くしたり拡幅したりしているだけで、基本的には江戸時代の姿が現代の姿です。

最近ナショナルジオグラフィックに掲載された、アラスカの川の写真を見ますと、これは人が住んでいない地域ですが、山から出てきた川が、わーっと流れ広がっています。これが原始河川で、大蛇と言われる所以です。江戸時代の人々はこの川を堤防を作って、

一つの川の中に押し込めてきたので、川は無理をしている状態です。無理をしているから、今でも注意しなければいけませんが、だからこそ我々は今、豊かなのです。江戸時代の祖先は、川を一つの中に閉じ込め、土地を有効活用し、日本人はみごとな富の蓄積をしてきたのです。

そして近年へ向かっていくわけです。近年は明治です。

江戸時代の「共同体意識」（アイデンティティとは少し違う）はどうやって生まれたのか？

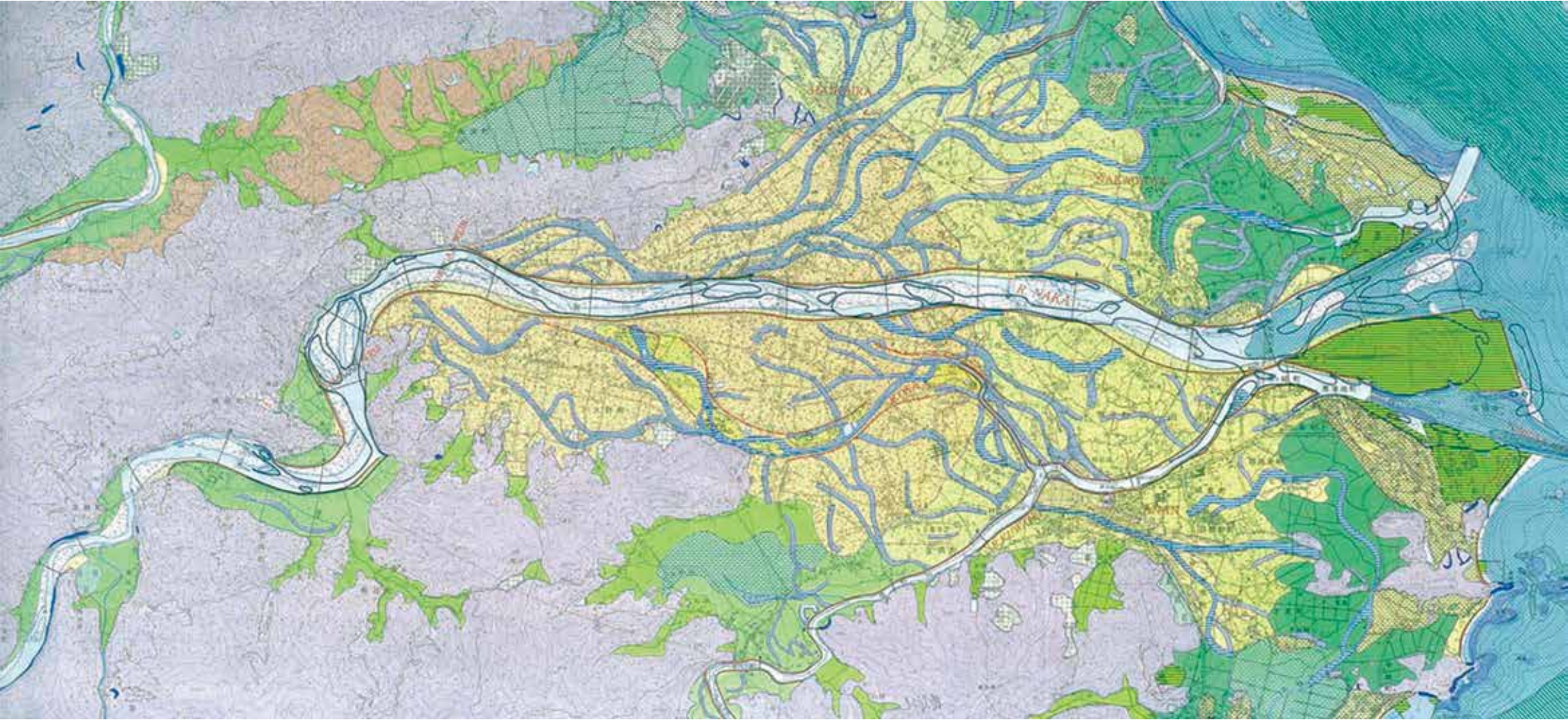
戦争の無い、敵のいないところでは共同体意識は

出来ません。250 年の江戸の共同体意識は、何だったんだろう。

ここで少し世界に目を向けてみると、ユーラシア大陸には移動する民族がいます。これはローマ街道、ベンハーという映画の騎馬競争のシーンです。馬車で駆け抜けていた世界です。これはモンゴル。凄い牛の大群が、バオを積んで大行進して世界を制覇します。これは秦の始皇帝の兵馬俑の馬車です。日本以外はみんな馬車、ビーグルを使っていました。アメリカも西部開拓は馬車で移動しました。こういう世界では、流域という概念は無いんです。世界のなかでも、流域、川辺に住んでいるという意識はあまり無いんです。これがとってもおもしろいところ。

ユーラシア大陸の滅亡を見ますと、彼らは敵だらけでした。これは紀元前 2 世紀の漢とローマと匈奴の関係、1 世紀のローマ帝国、7 世紀のトルコビザンチン帝国、8 世紀イスラム帝国とビザンチン帝国、9 世紀のイスラム、12 世紀に十字軍が出来て、13 世紀のモンゴル帝国、18 世紀にはオスマン帝国がユーラシア大陸を支配して、19 世紀にローマ帝国が出来た。世界の歴史は、ユーラシア大陸を巡ってどういう暴力が支配するか、どういう強い力が支配するかが歴史です。つまり自分たちのアイデンティティは、誰と戦うかが勝負でした。

イランとサウジアラビアでは、同じアラビア文字を使いますが、イランはイスラムに征服され、アラビア文字を強制された時に、全てペルシャ語に変えてしまいました。字は全く同じですが、文章の文法も発音も文字の意味も全く違います。両国は会話ができなくなってしまいました。これは自分たちの共同体意識を



那賀川流域水害地形分類図（出典：建設省四国地方建設局 細川内ダム工事事務所）

守るために生まれたことです。常に敵との関係で共同体意識を守ってきたのです。

世界のすべての文明は要塞化します。これはメソポタミアのウルの神殿、インダス文明のモヘンジョダロ、すべての文明の発祥地はみんな壁で囲まれています。これは万里の長城、これも壁です。これは福建省の円楼です。自分達の大家族だけで住んでいます。あの小さな窓から弓を射たりそのまま戦えるようになっています。この中に大家族が住んで、絶対に他の家族は入れない。中国は家族だけが信用出来る、その象徴がこの円楼ですが、家族だけが共同体という

民族です。

ところが、日本の平安京は、だらっとしています。朝廷の周りだけ低い堀がありましたが、1 m位の土塁です。とても堀とは言えません。これは江戸城、徳川家康のいた城の周りは、お堀に囲まれています、町そのもの、民衆が住むところには、まったく堀がありません。民衆には敵がいなかったのです。

では日本人には共同体意識はなかったのか。江戸時代、戦争の無い時代の敵は誰だったのか。戦争のある時代は一応あったんです。織田軍とか家康、秀吉、島津とかさまざまな地域で藩ごとのアイデンティ

ティーがありました。江戸時代、共同体意識を作るための敵は誰だったんでしょう。

これは現在の関東です。今から 6000 年前の縄文時代です。今より海面が 5 m高かったので、関東は海の下にありました。だんだん海面が低くなり、川が土砂を運び、人々がベトベトの湿地帯に住み始めました。これは新潟の田植えの風景です。腰まで浸かって長い竹竿でバランスを取りながら田植えをしています。新潟だけでなくこれは富山です。女性たちが腰まで浸かって田植えをしています。日本人の田植えの原風景はこういう湿地帯での稲作です。湿地帯での

稲作の敵は大洪水でした。今はポンプがありますが、当時はポンプがない時代、大洪水を堤防の中で早く流そうと努力をする、湿地と戦う、これが実は日本文明の江戸時代の姿なんです。昭和 30 年代までは、この地でも腰まで浸かって田植えをしていた人がいるのではないかと思います。

さて、洪水と戦う共同体、これは名古屋の治水神社です。賑やかな場所ではなく、堤防があって少し外れの寂しいところにあります。ある日、宮司さんに、何故こんな淋しいところに神社があるのと尋ねたら、ここに置いて人々を歩かせるんですというんです。実際、島津の藩士たちが治水事業のために、ここで憤死してますので、岐阜の人達が今でもそれをお祭りしています。これは筑後川、堤防の上でやるお祭りです。これは山形の花笠おどり。「突いて固めて でかした堤 水も漏らさぬ深い仲 ヨイトマセー ヨイトマセー」男女の恋愛の踊りかと思ったら違いました。日本各地のお祭りの原点は、堤防を守る事なんです。こういう祭りから文化が生まれています。何で堤防の上でお祭りをするのか、追いかけていたら武田信玄に行き着きました。

戦国時代の武田信玄は「信玄堤」を作った事で有名ですが、ここに水が当たって流れが緩やかになります。ここが一番危険な堤防です。ここに三社神社を作って、あちこちからワッショイ、ワッショイお神輿を集めてみんなが、踊り歩くようなお祭りをしました。赤やピンクで女装した人達が、ワッショイワッショイ三社神社まで歩くのです。一番危険なところを、みんなが歩くようなしかけの、お祭りです。

私の仮説は「地域を守るために洪水に対するお祭り

が生まれた」です。その証拠を見つけました。

神奈川の酒匂川の堤防近くの福沢神社の入口に石碑があって、私には読めないのので古老の方に読んで頂いたら、「お祭りをしなさい、木を植えなさい、石を持って堤防を固めなさい。」という3つのことが書いてあるんです。二番目、三番目は分かりますね。お祭りをしなさいとは、江戸時代の共同体意識は敵との戦いですから、敵は洪水です。何度も何度も、毎年毎年やってくる洪水に、みんなで戦う、力を合わせて地域を守るということです。その事で文化が生まれます。これは中国の夏王朝の初代皇帝で治水の神様といわれている、兎文命にちなんだ物です。

地域の共同体意識は思い出の共有です。江戸も大都会だったのですが、昔は小さかった。これは浅草寺これが隅田川で日本堤という堤防があります。なぜ、その堤防を作ったか。荒川がいつもここを突き破って氾濫していました。大名達は高台に住んでいます、庶民達が住んでいる所に堤防を作って荒川の洪水をこちら側へ持って行く仕掛けをしました。江戸時代、隅田川のこっち側は江戸では無かったのです。

これが広重が描いた日本堤です。非常に立派です。徳川幕府はもう一つ仕掛けをしました。それまで銀座の日本橋の近くにあった遊郭の吉原を、こんな淋しい所に移して新吉原としました。歴史家の方々は、遊郭は空气が悪いから、一番淋しい所へ移したんだと言いますが、こんな淋しい所へ、江戸中の男たちがぞろぞろ歩いて、堤防を締め固めていくのです。雨が降ると崩れるでしょう。すると「お役人さん、お役人さん、大変だよ。あそこ崩れているよ」と河川パトロールにもなりました。



歌川広重(名所江戸百景 四ツ木通用水引ふね)

インフラを作ったら、そこに人々が集まらなければいけない。インフラと人々が集まることは、一体のことなのです。いくら国土交通省が堤防を作っても、人々がいないとゴミが溜まり、草ぼうぼうになって堤防が朽ちていきます。人々が集まると、いろんな意味で堤防や川が強化されていくということを、武田信玄も江戸幕府も全国各地の大名も知っていたのです。乱流した川を堤防の中に閉じ込めて、自分たちで守ってきたんです。江戸時代は重機ありませんから、みんなの力で守ってきた。これが江戸時代の流域社会の、共同体意識のスタートだと私は思っています。

日本堤ができてこちら側に町ができました。こち

ら側にも作らなきゃと墨田堤ができ、桜を植えたり、向島の料亭を集めたり、最後には全ての芝居小屋を浅草寺に持っていきました。今の浅草六区の発祥です。花火を上げたりして、江戸中の人が四六時中、浅草の川沿いをわいわい歩く、お祭りのような仕組みを考えたんです。それが江戸の原点です。

江戸時代に、流域の共同体意識が生まれてきたということは、知っておいて頂きたいと思います。

次に近代に入っていきます。アヘン戦争があって、ペリーが来て、大政奉還が始まって、王政復古があり、勝海舟と西郷隆盛の会談で江戸城が火災から守られ、日本が近代国家へ入って行きます。

日本が封建社会から近代社会へ入っていく時、3000 キロも縦に長い日本列島の地形で、なぜ同じ日本人意識があったか不思議です。流域単位での共同体意識は、すでにお話ししました。でも近代に、日本全体で日本人としての共同体意識が一気に広がり、強まったことはとても不思議です。こんなに分断された地形の中で育ってきた日本人が、何故共通意識を持てたのか。

じつは西郷隆盛、勝海舟の会談には、通訳がいなかったんです。これはとても不思議なことです。EUの国際会議は、20 数力国の言葉で同時通訳をしています。EU はあんな小さな所で、国の言葉がばらばらです。ところが日本人は、方言は持っていましたが、同じ日本語を話します。これは不思議です。同じ日本人としてのアイデンティティを持って近代化に向かって行けたのです。他の植民地、インドや中国では、言葉が地方によって分裂していたので、内紛も起きました。それを利用して帝国主義は、内部を分裂させて

統括するという、植民地政策（リバイデンロード）を行っていたのに、日本は分裂しなかった。

その答えがこの広重の絵です。舟です。この絵の日本橋の下を見て下さい。沢山の舟が小運搬しています。外洋を通して港に入った舟の荷物を、小さな船が川の上流へ小運搬していました。この絵では、堤防に沿って人が舟を引っ張っています。これは横山大観の「曳舟」という絵です。強力が二名で舟を引っ張っています。こんな瀧しぶきがかかるような山奥まで舟が入っていきます。

入って行くのは江戸の情報です。各地方からは、米だとか材木だとか、江戸に入ってきます。では江戸からは何が伝わったか。瓦版とか浮世絵とか、各地のきれいな装飾品です。江戸でかき回された、すべて日本中の物が、川を伝って地方に戻ってきます。川は情報のルートだったのです。

九州の筑後川の流域に、日田という町があります。ここには材木で儲けた豪商が、日本中のお雛様を江戸から集めて飾りました。今でもあります。つまり、全国から江戸へ、色んな物資が送り込まれ、江戸の貴重な情報がほぼ同時に、全国に伝えられます。どんな山の中にいても、江戸で起きた事件を知っていたのです。相撲取りの谷風が勝ったとか、大石内蔵助が討ち入りしたとか。それも同じ字、日本語で。

つまり日本中の人達は、250 年の江戸時代、藩には分かれていたけれど、水という海と川のネットワークで完全に情報を共有した、一つの国民としての（国民という概念は無かったかも知れないのですが）同じ言語を喋る民族として共同体だったのです。

幕末の植民地になりそうな非常に危険な時期を、

同じ言語で固まって守ってきました。それこそが近代への突破口となったと思います。日本人が同じ言語を話して日本人という共通認識を持っていたという事が、非常に大きかったと思っております。

さて近代、「流域封建制度」がそのまま、流域の分散した権力が頑張り続けていたら、日本国という国民国家にまとまらなかったと思います。ところが日本は一気に国民国家に変身したのです。

明治の一番厳しい戦いが廃藩置県でした。明治元年頃、二つの戦いがありました。武力の戦いではなく、大久保利通と西郷隆盛グループと大隈重信、伊藤博文グループの戦いです。これは蒸気機関車を巡る戦いです。一方は導入、一方はお金がない。伊藤、大隈はイギリスへ行って、日本の債券をばんばん売って大金を持って帰ります。そのお金で新橋・横浜間に、蒸気機関車を作りました。蒸気機関車はこれまでの流域の地形を無視して、地形の制約を超えてしまったのです。新橋・横浜間の開通式で蒸気機関車に乗った大久保利通は「これだ!」と日記に書いています。大久保は頭が良かったので、徹底的に全国の国鉄インフラへ投資をして、明治 23 年には、ほとんど全国の本線を完成させました。これが大きかったんです。

鉄道網が完成した明治 23 年、国民国家としての帝国議会が東京で開かれます。蒸気機関は、東京に財力と人間を集める装置となりました。地方の流域に住んでた人達は、鉄道が出来たことで、皆が飛び乗りました。熊本の分家の四男坊だった私の父も、熊本から横浜へ出て行きました。それで私は熊本生まれの横浜育ちです。蒸気機関は、大都会に行けるという装置だったのです。あっという間に東京に全ての物が

集中します。蒸気機関が、流域を分断する、破壊する装置となりました。それは流域封建制度をも破壊する装置となったのです。

流域主義から国民国家へ移行し、東京にすべての物を集中させて歴史上最後の帝国主義の時代に入ります。後に大失敗もしますが、最後の帝国主義国家をつくることが出来たのは、東京へすべての財力と人間を集める装置が出来たからだと思っています。

東京はもの凄い勢いで拡大し、アメーバーのように広がっていますが、これはすべて鉄道の沿線です。このように東京を中心とした日本国が大きな力を持って、今、世界第三位、最先端の国力のある国家になったのが近代です。近代とは、流域社会の崩壊だったのです。

次は、ポスト近代へ。近代というのは何か、もうお分かりですね。幕末から、流域に住んでいた日本人が都会に集まって、力を集中して世界に向かっていくシステムを作ったのが近代です。

ではポスト近代は何。これは、約 1000 年間の人口のグラフです。弥生時代から始まって江戸時代、戦国時代が終わり急激に人口が爆発しました。やはり平和というのはすごいですね。この爆発をして 3,000 万人を超えた所から平衡状態が続いて、今度は明治の近代化の爆発です。この時は、耕地の拡大による爆発です。収穫が上がったんです。各地域で国土開発がありました。

ではここでの爆発は何なのか、外部からエネルギーの注入です。もちろん明治の初頭には石炭がありました。でもここで注入されたのは中東の有り余るエネルギー石油です。石油を知恵とエネルギーを使って加

工して売り込むことですごい大儲けをしたのです。それが近代です。

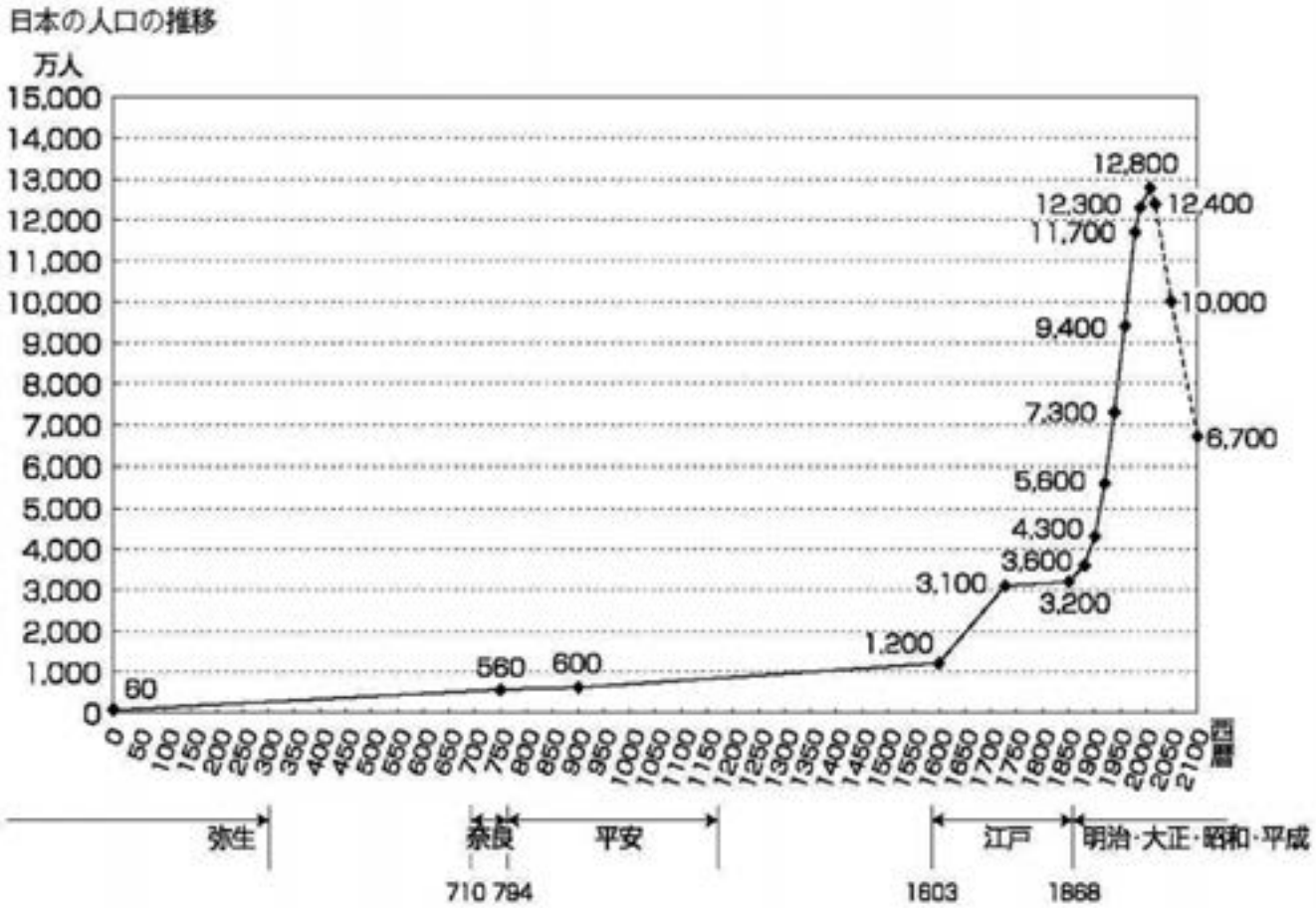
さて今私達は、グラフのここにあります。ここから下がっています。我々は、日本の歴史の中でも非常におもしろいところにいます。こんな極端な動きをする時代はは、もう二度とありません。

ここまでずっと膨張してきて、平成 20 年くらいがピークですね。人口がピークから下がっていきます。ポスト近代はここから先のことです。

人口だけ見ても、近代とポスト近代は全然違うということが分かります。近代と同じことを考えてはいけないんです。近代で僕たちがやってきたことと同

じことを、やれるわけがない。だからこれからの生き方は難しいのです。これは GDP のグラフですが、ここで第 2 次世界大戦が終わって、GDP がアップします。急激な膨張の時代の価値観ははっきりしていました。「効率」です。全てが「効率性」へシフトしていれば良かった。会社でも利益を上げるために「効率」が絶対でした。

ここまでは日本の社会全体が膨張する圧力の対応に一生懸命でした。水が足りない、住宅が足りない、年中交通渋滞を興す、常に水害がおくる、全ては膨張圧力に対する対応だったのです。過去、私が生きてきたのはまさにこの時代です。ですから私は、膨張す



出典：国勢調査 ※1850年以前は、鬼頭宏「日本二千年の人口史(PHP研究所)」。将来人口は、(財)日本人口問題研究所(中位推計)による

る時代への対応はいくらでも出来るんですが、これからどうして良いかは分からない。皆さん方自身が考えなければいけない。誰も教えてくれないのです。

膨張するときの対応ぶりは、先輩達がいくらでも教えてくれます。効率です。効率とは、単位面積あたりの生産性、単位時間あたりの生産性を上げることで。それには都市へ人口を集中をすれば良かった。効率をあげるためには、画一性、大量生産、スピード化、マニュアル化、工法化が必要でした。これがまさに近代だったのです。

都市の集中は大正解でしたが、都市への集中が地方の衰退をもたらしました。

このままこれを進めて良いのかがこれからのテーマです。今みんなでそれを考えていく必要があります。都市への集中が、地方の衰退をもたらし、自然環境を壊した、というよりも自然に負けていくプロセスです。人間が絶えず手を加えていかないと、僕たちの国土を人間が住む国土として維持管理できないという辛さが生まれました。人間が手を加え続けていかないと、人間が住む環境を作れないのです。

地域多様性の喪失。それは画一性です。今、子どもたちはテレビをつければ、北海道から沖縄まで全く同じ文化を共有しています。今日、感動した先ほどの子どもたちの踊り「權伝馬踊り」はここだけのものです。何物にも変えられない貴重な踊りです。

地域の多様性がなくなると、自然が壊され、農林漁業の衰退がおこり、農林漁業が衰退すると日本国土が崩壊していくというのが現在の問題点です。

限界が完全に見えてきました。世界的、地球的に見ると、気候変動という大きな制約があって、地球規

模の環境悪化がはっきりしてきました。資源が制約されてきました。エネルギーだけでなく、リン鉱石が、今世紀半ばに無くなります。2050 年頃にリン鉱石が無くなると、化学肥料が無くなります。

一事が万事で、すべての身近な資源が無くなっていくグローバルな問題、これは1個1個やっていくとおもしろいんですけど、今日は時間が無いので、ごめんなさい。

気候変動、温暖化は間違いなく進んでいます。それはCO2が本当の原因かどうかは、分かりませんが、間違いなく温暖化は進んでいます。もしかしたら大きな地球のうねりかも知れません。環境悪化も間違いありません。日本の現在は、都市の極度の膨張という問題を突きつけられています。あの東京、大阪の都市は異常です。人間が住んでいる所とは到底思えません。でもビジネスをする場所としては一番効率的なので人が集まっています。情報も多く、それは否定しません。

しかし、ポスト近代とは一体なんだろう?これから何をしたらいいのだろう?いろいろな分野の考えがありますが、私は川の間人なので、どうしても川、流域というところに自分の考え方を持ってきてしまいます。

ポスト近代は人口が減っていきます。今までと全く反対のことを考えてみましょう。効率という言葉の反対はなんだろう?まだ見つかっていません。皆さんも一緒に考えて下さい。少なくとも画一性の反対は多様性、集中の反対は分散型、自然破壊の反対は生態系のサービスの享受（これは国連の用語です）が、要は自然の恵みを享受しようということです。これがこれからの世界の常識になるだろうと思います。

これからはどうやら、多様性であり、分散型であり、生態系のサービスを受ける社会を作っていこうという事であろうということが分かってきました。

21世紀の国土は、ネットワークが大事です。蒸気機関はネットワークでは無いのです。単に東京に集める装置です。地域を分断させないよう交流するため、今、一生懸命、高速道路を造っています。高速道路はネットワークをする装置です。

この延岡が、いろいろな所と高速道路によって繋がれることはとても大事なことです。どこかへ繋がるネットワークがあると、安心してそこにみんなが住めます。

多様性のある地域、分散型のネットワーク社会、生態系サービスの享受、これがポスト近代の地域の大事なキーワードだと思います。本当に全部がこれで解決できるかどうかは分かりませんが、実現するには近代と反対のことを考えれば良いんです。僕はもうポスト近代を動かすエンジンでは無いのですが、若い人たちが本当にこれをやれるかどうか興味が有り、おもしろいと思っています。

集中からネットワーク、イメージとしては9電力、北電や九電などの大きな電力会社が地域のエネルギーを支えていたけれど、大都会は当然大電力会社がやらなければだめですが、地方は地方で分散型で自立したエネルギーやっという。これがこれからのエネルギーのイメージです。これは、分散型のエネルギーに関係する人間が使っている図面です。大都会を否定しないで、地方は地方でそれぞれがネットワークで分散型でやっというということです。

最後になりますが、製造業が全部グローバル化しています。インド、中国、ミャンマー、など需要のあ

るところで物を作った方が、遙かに効率的です。日本国内で工業製品を作って持って行くより、現地で工場を造って、現地の方々の豊かな労働力と、彼らを豊かにする日本の教育で製造して、そこで消費をしてもらう。それが製造業の考えることで、日本にいる必要は無いのです。知恵だけあれば良い。キーになる部品だけ日本で作れば良いんです。

ではいったい、ポスト近代、日本列島から離れられない産業はなにか。それは、林業、農業、水産業、観光、サービスです。でも今ある農業、林業、水産業でなく、違ったイメージです。実はこれを皆さんに考えてもらいたいんです。新しいこの産業を盛んにすることによって、世界中からの観光のメッカになります。

実はサービスも日本列島から離れられないのです。なぜかという僕たち人間自身がいるから。これもけっこう多いのです。運輸、建設、科学、教育、医療、芸術、色んな物があります。

新しい流域産業を作りましょう。それには流域共同体意識のベースが必要です。流域共同体意識とは思い出の共有です。これは東京の三河島ターミナルの150年前の写真ですが、駅についてもスーパーが無い、喫茶店が無い、キャバクラが無い、パチンコ屋も無い、こんな彼らの思い出は、この自然の景色です。実は思い出というのはこんな事です。どこの駅に降りても同じチェーン店があり同じような街並みでは無く、その地域だけの思い出がその地域のアイデンティティなんです。

先ほど見た踊りをしている子どもたちは、とてもよい経験をしています。単なるテレビゲームじゃなく、決してお金には換えられない、とても貴重なふるさと

の共同体験をしている。自分がそこにいたという、その思い出こそが、アイデンティティです。

塩野七生さんが「本当の国際人、国際的外交官は心の中にふるさとを持った人」と書いています。彼女はローマの歴史の様々な修羅場を調べたのです。そんな中で最後まで動じない、不動の外交をやれる人は、最後に帰って行く「小さなふるさと」を持っている人だといっています。良い言葉ですね。東京にいて、ぺらぺら英語をしゃべって、国際会議に行くことが外交官ではないんです。小さいとき「よいしょよいしょ」とやっていたあの子ども達の中の一人がもし外交官になったら、強烈な外交官になります。何しろ帰って行くふるさとがある。帰って行くふるさとを持たずに英語をしゃべる人間は、最後の最後で踏ん張りが効かない、と塩野七海さんは書いています。

五ヶ瀬川を中心に、皆さんがどうやってこの地域を活性化していくのか。五ヶ瀬川周辺にある文化はとても大切です。歴史をもう一度掘り起こして、その文化を見つめ直し、再認識して大事にしていく事がとても大きな財産になります。それを大事にして、子どもたちにも伝えていってほしいと思っています。

短い時間、大変早口で失礼しました。ご静聴有難うございます。

以上

(当日、竹村さんが使用されたスライドは、印刷するには著作権の関係があり、全ては載せられませんでした)

活動報告

パネルディスカッション



団体名

リバーフェスタのべおか実行委員会

活動名

第21回 リバーフェスタのべおか

活動範囲

宮崎県延岡市 五ヶ瀬川

発表者

寺田 陽介（実行委員長／RAC インストラクター）
國友 弾 （前実行委員長／RAC リーダー）

【概要】

本会は、「ふるさとの川再発見」をテーマに、市民に地元の川の素晴らしさを伝え、大切にすることを育み、ふるさとの川に誇りを持ってもらうことを目的としています。

内容としては、段ボールとガムテープのみを使用した「DAN ボートレース」や「川プール」、**「川の安全教室」**などの『体験コーナー』、**「水生生物・水質調査」**や**「水質汚濁防止パネル展」**などの『学びのコーナー』、他にも『創作コーナー』、『ゴミ拾いコーナー』などを準備し、多くの市民が川に親しみをもち、環境について考えてもらえるような工夫をしています。一昨年から延岡市岡富南地区青少年育成連絡協議会も参画し、小学校との連携にも力を入れています。



【報告】

カッパ登場。実行委員会です。

目的：ふるさとの川再発見。延岡の川は水郷の街ではあるがほぼ遊泳禁止となっている。
安全に川遊びが出来るための企画提案。

川の安全教室：川流れ指導。レスキュー指導。

DAN ボートレース：スタートと同時に大体は沈没。川と一緒に触れ合うことが目的なので、沈んでも OK。

川プール：スタッフも一緒に流れ、和気あいあいとした川遊び空間創り。ペットボトルをヌカロンネットにいれ、浮かべて遊ぶ。また、遊びながら流れ方を学ぶ。テーマを毎年変えて川の安全教室を開催している。

水生生物調査：どういう風に美しいのか。実際に採取した生物を鑑賞し、生き物に触れる。

参加した子どもたちは大喜び。大瀬川ではウナギ、モクズガニなどの放流も。遊びと学びを一緒に合わせたイベント企画を行っている。遊び、学ぶだけでなく清掃活動も行っている。延岡の川の素晴らしさを子どもたちに伝えられるように、守れるように。
現在 21 回目だが、真剣に第 100 回リバーフェスタを目指す。



団体名

宮崎県立 延岡工業高校 土木科 3 年 川づくり班

活動名

地域伝統工法「なんば引きへの挑戦」～地域伝統工法の伝承・川づくりの研究

活動範囲

宮崎県延岡市 五ヶ瀬川流域

発表者

中武 大樹（班長）・下田 一樹（副班長）・染矢 亮・中村 俊貴・佐藤 航平・島田 翔

【概要】

土木工事の中に生きる先人の知恵を学びたいと、このテーマを選びました。

なんば引きは昭和 30 年代頃まで行われていた、護岸工事の地締め・杭打ち作業のことで、「北川町温故知新の会」の協力で校内で体験実習を行いました。

伝統工法を、未来にしっかりと継承していきたいと思っています。



【報告】

就職率が高く、資格取得は全国トップクラス。
東日本大震災をきっかけに、伝統工法に興味、関心を持った。ライフラインの重要性を認識。
今までも井戸掘り研究、石積み講演会、蛍再生、なんば引きから伝統工法を学んできた。

なんば引き：護岸工事の地締め、くい打ち作業の地域伝統工法、助け合い。

テーマ設定理由：多自然川作り、先人の知恵に学ぶ。

なんば引き音頭：五人がチカラを合わせて音頭を歌う。

チカラを合わせることの大切さ、次世代への継承、なんば引きを通して環境に目を向けることで蛍の再生へ繋げようと思う。
環境に目が向く土木技術者になりたいと思う。

多自然川作りの研究を引き続き行い、環境科学システム科とのつながりを築いていきたい。



団体名
天下一五ヶ瀬かわまち創ろう会
活動名
お父さん、お母さんのための川遊び村
活動範囲
宮崎県延岡市 五ヶ瀬川・大瀬川（川中地区）
発表者
佐伯 卓信・黒木 幸喜
【概要】
延岡市では、五ヶ瀬川を軸とした地域の活性化や交流の促進、河川空間利用者の安全性の向上などを目的に「五ヶ瀬川かわまちづくり」の取り組みを進めています。「五ヶ瀬川かわまちづくり」の実践組織として設立された「天下一五ヶ瀬かわまち創ろう会」は、五ヶ瀬川の利活用促進の一環として平成 26 年 7 月 20 日に「お父さん、お母さんのための 川遊び村」を開催しました。開催当日は延岡市内の親子約 50 組が五ヶ瀬川に集い、安全に川に親しむための「ライフジャケット着用教室」、「川プール体験」、川の環境を知るための「水生生物教室」を体験しました。お父さん・お母さんたちは子どもたちとともに五ヶ瀬川に親しみ川遊びの楽しさを体験しながら、安全に川で楽しむための方法を学んでいました。

【報告】

- お父さん、お母さんのための川遊び村がテーマ。街の中心部を五ヶ瀬川・大瀬川が流れる。鮎やなは 300 年以上の歴史がある。川にまつわる貴重な歴史資源が数多く残されている。
- 水害が多く地域住民が自ら地域を守り、各地には水神様が祀られている。

- 延岡の街の魅力、五ヶ瀬川の魅力をつなぎ、地域の人々、学識者、行政が一体となった町づくりを目指している。安全利用のための整備、継続して利用できるよう循環利用の仕組み作り、川と街をつなぐ水辺の利活用をイメージしている。
 - 「回遊できる散策路」「文化・自然活動ゾーン」「自然の恵み体験拠点」の 3 つの拠点を重点的に利用できるよう促進を行っている。
- 散策路**：ジョギングがしやすいように整備をしている。将来は川沿いを一周できるように整備を行う。

文化・自然活動ゾーン：お父さん、お母さんに川遊びを知ってもらうことが大切。それをコンセプトに川遊び村が開催された。

自然の恵み体験拠点：秋に掛かる鮎やなを眺め、食べることもできる拠点、カヌーツアー体験の拠点にもつなげる。

川遊び村の事例：保護者の付き添いが必要だが、川遊びの体験がない人が多い。今年 7 月 100 名近い親子の参加があった。

ライフジャケット着用：うっかりサンダルで来た人がいた。セーフティトーク。川プールでおもいきり遊ぼう。子どもと親と川の距離をどんどん縮めてもらうことが目的。牛乳パックで箱眼鏡づくり、発砲スチロールボート。延岡にはわざわざ来てもらえるワケがある。



団体名
NPO 法人 白川流域リバーネットワーク
活動名
水防災プロジェクト in 白川
活動範囲
熊本県 白川流域
発表者
志水 隆司
【概要】
平成 19 年より「水防災プロジェクト in 白川」として、流域住民を対象に水防災や水難水防災プロジェクト in 白川事故防止を目的として継続発展型の講習会を行っている。受講者の「意識」「知識」「技術」を向上させるためにレベルで区分した 3 種類の出前講座（①初級講座、②水防災リーダー講習、③救助技能取得講習）を開催している。
加えて、本法人メンバーで資機材の備蓄と資機材を使った訓練を行っている。
この他、今年度の活動では九州北部豪雨による白川流域の被災地域で災害ボランティア活動を行った。この活動概要と活動を通してみえてきた課題について発表を行う。

＜災害ボランティア＞

- 7 月 14 日（土） 熊本市龍田 1 丁目で 14 人活動。家屋周辺の土砂の撤去。
- 7 月 15 日（日） 熊本市龍田 1 丁目で 9 人活動。家屋周辺の土砂の撤去。
- ※ 15 日以降は、定期的に活動に参加を続ける。
- 8 月 5 日（土） 阿蘇市内牧で炊き出し支援活動。100 人分の昼食（牛丼、ハマグリのお吸い物）を炊き出し。

＜キーワード＞

- 常にもし…を考える
 - 体験とイメージを通して学ぶ防災活動●継続と発展
- ＜今後の課題＞
- 災害時の連絡体制と組織の動きについて
 - 防災リーダーの育成について
 - 持続的に防災活動を進めるための方法
 - 防災と河川環境のバランスについて
 - 関係機関との連絡調整

【報告】

1. 防災出前講座の開催
- 白川の地元住民向けの出前講座を行っている。
2. 水防災・河川活動リーダー講習会の開催
- 危険予知トレーニング、ラフトボード等の操船技術指導
3. 救助技能取得講習会の開催
4. 防災用備品・救助機材の備蓄
- 炊き出し機材、下中上流域
5. インベーション構築と推進

白川水系の主な浸水箇所。住宅に接近してのヘリコプター救助があった。ハマグリのお吸い物を受けて、災害時、阿蘇での炊き出しを行った。



団体名

青森県小川原湖自然楽校

活動名

本州でっぺんの湖は、北の漁業と南の漁業の分岐点

活動範囲

小川原湖（高瀬川流域）

発表者

相馬 孝(小川原湖自然楽校 代表／RAC・CONEトレーナー／NEAL 主任講師／プロジェクト・ワイルドファシリテーター／プロジェクト・WET ファシリテーター)

【概要】

本州最南の漁 氷下曳漁

アムール川（黒竜江）発祥の氷下曳漁は、ここ小川原湖が本州最南です。湖が全面結氷した時にだけ行われる漁で、網の入れ方が独特で、熟練者でないと魚の場所や網の通し方がうまくいきません。

マテ小屋

東南アジア発祥のマテ漁は、ここが日本最北です。川や湖の中に柵を設け網を仕掛けたらマテ小屋で魚が掛かるのをひたすら待つというゆるい漁です。

冬の風物詩 ワカサギ釣り

青森県において、これほど大きな湖が全面結氷するのは小川原湖しかありません。氷の厚みが 20cm もあればびくともせず、大人から子どもまで思い思いの場所で糸を垂らし釣ることが出来ます。

【報告】

本州でっぺんの湖は、北の漁業と南の漁業の分岐点。青森県は北のはずれではなく本州のてっぺん。長靴の形をした小河原湖は全国 11 番目の大きさで、汽水湖の中では 5 番目の大きさを誇る。縄文時代は 2 倍

の大きさをした海だったが、3000 年前頃に海面が低下して今の形の湖になった。

マテ小屋→東南アジア由来

氷下曳漁→小川原湖が最南。近年気候変動で氷が張りずらいので、数年に 1 度しかできない。地域からも要望あるが、なかなか開催できていない。ワカサギやシジミが取れる。巻き手とじょれんの投げ手にわかれて行う。

マテ漁→東南アジア発祥の漁で、現在は継承して行っていない。漁連の関係上、今は子どもたちの体験という形で行なっているのみで衰退している。マテ小屋がある所自体珍しく今後も継続。

ワカサギ釣り→氷に穴を開けて子どもたちと一緒に釣る。



団体名

東京都大田区立額町小学校

活動名

多摩川における「川に遊び、学ぶ活動」

活動範囲

額町小学校前の多摩川（河口 12 km）

発表者

牛島 貞満（額町小学校に勤務して 5 年目。以前に多摩川、荒川の総合学習を展開した経験を持つ。）

【概要】

本校は、多摩川下流に位置し、堤防を挟んで校舎から川岸まで約 200 m という恵まれた環境にある。特色ある教育活動として、10 年前より、生活科・総合学習で石ひろいや川流れなどの「多摩川活動」が実施されてきた。5 年前からは、3・4 年生を中心に生き物調べも行われてきた。自然と触れ合う機会が少ない子どもたちにとって、川をフィールドにした活動は、魅力的で豊かな学びに展開できる可能性を持ったものである。単なる活動に終わらず「どう授業として展開」させるのかが問われている。

教科書や指導書がない活動の実施や継承には教師のエネルギーな主体性が必要である。今年度から、「多摩川から学ぶ」を校内研究のテーマとして取り組みを始めた。カリキュラムの見直し、河川敷部分の有効活用、地域の方々との連携が課題となっている。夏休みには、校内研修として「RAC 学校リーダー講座」を受講した。取り組みは、まだ端緒に着いたばかりである。

【報告】

川に学び、学ぶ活動

●一級河川多摩川の河川敷からわずか 200M の立地。住宅地で木々が少なく児童たちが自然に触れる機会は少ない。

●アユの遡上が 540 万尾を超えた→高度経済成長による川汚染から下水処理の改善により環境が戻ってきたため。

多摩川活動 「川で遊び、川から学ぶ」

校内研究 「多摩川で遊ぶ」

●10 年前から行っている活動が、教員の入れ替えなどにより継承が難しく、停滞してきている。

●問題点は干潮時にしかり川に入れないこと、河川敷を効果的に使えていない、体験だけに終始して授業としては成り立っていない。河川敷空間、生態層を利用した授業の経験不足、地域や各機関との連携をどのように行うかということ。

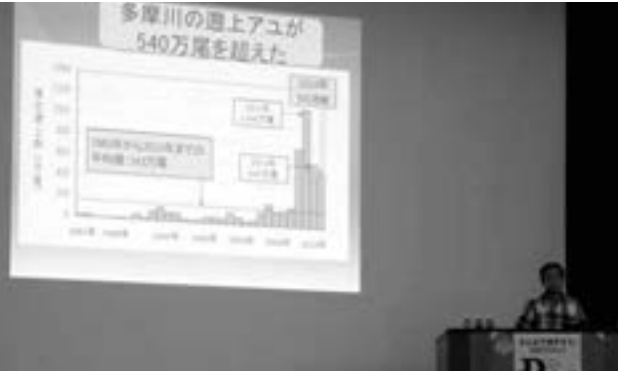
●今年からは上級生が下級生に石拾いや生き物調べ、草木調べを教える。現在 15 種類程の生物を飼育している。

●2 年生の国語の学習として、4 年生が持ってきた生物を観察しスケッチしたり、文章を書いたりする。

●5 年生では川で流れる体験をする→上流と下流の比較体験

●今年度の課題は教員が河川で十分な指導ができ、安全管理が出来るように養成していくこと。

●RAC 学校リーダーを受講したり、地域のコミュニティーから学ぶ場を作ったりしている。



団体名

新潟県見附市

活動名

見附市防災スクール

活動範囲

市内学校・大平森林公園など

発表者

水内 智規（見附市企画調整課 主事）

【概要】

見附市を流れる刈谷田川は、平成 16 年、23 年の大雨によって水害をもたらしました。そこで、見附市では、主に水害に重点をおいて、子どもたちが、いざという時に自ら判断し、命を守る行動がとれるように、また、身近な自然に親しむことで地域への愛着心をはぐくむために、平成 24、25 年度と文部科学省委託事業として「防災キャンプ」を実施しました。その成果として得られたプログラム、総がかりで実施するためのパートナーシップなどをもとに、さらに実施校を拡大して各学校・地域の特色や実情を生かした取組、「防災スクール」を行っています。

防災スクールのポイント

- 川の怖さを学ぶだけでなく、身近な自然に親しみ地域への愛着心をはぐくむ
- いざという時、自他の命を守ることができるスキルを身に付ける
- 地域・学校・行政・NPO が一体となり、総がかりで取り組む活動

【報告】防災スクール

7.13 水害、中越大震災より防災、減災に力をいれて取り組んできた。しかし 3.11 以降これだけでは十分ではないことが明らかになった。

- これまでの防災教育の課題として、「座学・避難訓練が中心」「郷土愛を育むアプローチの弱さ」「地域に根ざすという意識の薄さ」の三つが挙げられる。

- 課題を克服するために文部科学省からの委託で、地域に根ざした防災スクールを開催し、そこでできたモデルプランを広域に広める取組み。

- 重要視したのは、体験に基づいた知識・技術の定着、地域に根ざすという視点、地域に愛着をもてるプログラムの開発、総がかりで行うシステムづくり、大人の意識、スキルの醸成。

- 地域連携の視点から、指導者は地域の消防署やコミュニティの人々。

- 消防署からは 7.13 水害の映像を、地域の人からはその時の生の声を聞いた。



- 市役所職員からはハザードマップの使い方、逃げ時、避難場所などの学習。

- 自他の命を守るためのスキルを学ぶ、見附レスキューを行う。竹竿や毛布、T シャツなどを利用した救急搬送の方法を学び、着衣泳やスローロープ体験を行った。

- RAC 指導者の協力の元、刈谷田川での E ボート体験やライフジャケットの正しい着用方法などを学び、実際に川へ出てボートを漕いで生物調査を行った。

- 「川は怖い」「災害をもたらす」というだけではなく「川は楽しい」「地域の自然の豊かさ」の再確認する貴重な機会であった。波及効果も大きく、市の防災訓練に児童 25 名が参加し大人とともに消火訓練などを行う。

- 参加した児童の約 80%が防災キャンプ経験者であった。「地域の一員」という意識の芽生えではないかと思われる。

- H24 年度から市内の防災訓練では年々増加傾向に有り、最近では 76%以上の中学生が市の防災訓練に参加するようになっている。

- 防災スクール。国の支援を受けて実施。防災教育の鍵にはなるが全てではないという意識で行われている。「指導計画の見直し・強化」「領域関連を図る工夫・改善」を行う。また学校と地域が一体化し、教育委員会は各関連期間との調整を行う。

- 地域とのパートナーシップが出来ているからこそ出来る内容を検討。

- 搬送体験学習、スローロープレスキュー、ハザード

マップ学習、寝食は非常事態を想定して、備蓄してある、非常食からスタート（全て地域のコミュニティーを交えて）

子どもたちの声

- 防災意識の向上はもちろん、日常の対する感謝の気持ちや親子のコミュニケーションなど、それ以外の波及効果も。

- 集団生活に伴う協調性や自立心、郷土愛などの醸成にもつながった。



パネルディスカッション

テーマ 「伝統的な川文化」を継承する体験活動

パネリスト	三橋 さゆり 氏（国土交通省河川環境課 河川環境評価分析官）
	名和 あけみ 氏（NPO法人 長良川環境レンジャー協会 理事）
	杉尾 哲 氏（NPO法人 大淀川流域ネットワーク 代表理事）
	首藤 正治 氏（延岡市長）
アドバイザー	竹村 公太郎 氏（NPO法人 日本水フォーラム 事務局長）
コーディネーター	土井 裕子（第14回 川に学ぶ体験活動全国大会 in 五ヶ瀬川 実行委員長）



土井： それではこれからパネルディスカッションを始めます。先ほどの竹村さんの基調講演や、7つの活動報告で、現在、川についてどのような考えの基、どのような活動や施策が進んでいるか、というような事が大まかに皆様に伝わったのではないかと思います。このパネルディスカッションは、それをさらに深く分かりやすく皆様に知っていただく場に来たらと思っています。

最初それぞれの皆様に、ご自分の自己紹介も兼ねて、今、川とどのように関わりを持ってられるかをお話し頂きたいと存じます。

まず最初に、名和あけみさんからお願いします。名和さんは本日、岐阜県からお越しです。子どもの水辺体験を中心に様々な活動をされています。

名和： こんにちは。皆さん岐阜県というと、飛騨高山はご存じだと思いますが、全国に行きますと「山の中からようこそ」といわれます。実は濃尾平野の木曽三川の1つの長良川の中流域、岐阜市にある長良川環境監視センターにある、NPO法人長良川環境レンジャー協会で活動しています。

当協会では「清流長良川を次世代に引き継ぐ」ことを基本理念に、4つの事業をしています。1つ目は「河川環境啓発活動」、川の清掃活動や河川利用者への、水防災も含めた水辺安全利用啓発という活動を行っております。2つ目は「調査研究」地域や学校と連携して長良川流域の水質調査を行って16年になります。3つ目は、この後お話しさせて頂く「環境教育活動」。4つ目は「広報・企画活動」、当協会がどのような活動をしているかとか、流域連携などもPRしながら活動しています。

その中で一番力を入れているのは環境教育活動です。7年ほど前からは木曽川、揖斐川にも活動を広げながら、地域で活動している団体とも連携して、子どもの水辺安全講座中心の環境教育活動。また、長良川エコレンジャー自然体験活動。これは年間を通して、森から海に繋がる「森が荒れると海も大変なん

だよ」ということを子どもたちに伝えるため年間プログラムを作って、地域で活躍するエコリーダー養成にも繋がっています。もう一つ力を入れているのは小中学校への出前講座。これは先生達との信頼関係を築きながら、私達が学校へ出向くこともありますし、一緒に野外に行って活動することもあります。

土井： ありがとうございます。実は長良川環境レンジャー協会は理事長と名和さんのお二人だけでこれだけ幅広い活動をしておられます。名和さんが一人でどれだけの活動をこなしておられるかということですが、いかに地域を巻き込んでおられるか。それは後ほど、伺いたいと思います。

では次に、杉尾先生にお願い致します。スライドがあります。

杉尾： 大淀川流域ネットワークの杉尾です。フランチャイズは大淀川ですが五ヶ瀬川の方にも深く関わっています。平成9年の北川激特事業、平成17年からは五ヶ瀬川の激特事業、どちらの委員会にも関わると共に、この前まで竹村さんがいらしたリバーフロント研究所が事務局を務める「河川生態学術研究会」の北川研究グループと五ヶ瀬川研究グループの代表をしていて、治水、利水、環境保全が調和するように激特の事業を考えてきました。

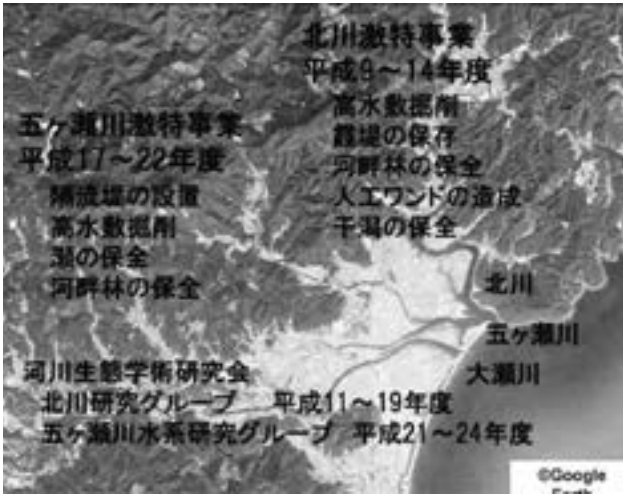
この五ヶ瀬川研究グループは、今年の6月に土木学会から環境賞を頂きました。この表彰状は、今晚の交流会の席に持って行くことになっています。

五ヶ瀬川の研究はもう終わりかなと思っていたら、「五ヶ瀬川・川まちづくり」に引っ張り込まれました。

五ヶ瀬川は二度の激特事業を経験しても、自然が豊で生物多様性も残っているので、河川特性を活かせるように「天下一川まちづくり」がスタートしたと思っております。この活動が素晴らしいのは、活発な実践活動が行われているということです。今年も2月に「天下一ひむか桜・菜の花祭り」が開催されました。

五ヶ瀬川の観光築（やな）が掛かるところに、食事処が毎年作っては壊されていましたが、常設の施設と

パネルディスカッション



して残して川のアクティビティの拠点として残したらと
いっていたら、どうやらそうなりそうです。

上流では高千穂町の「神代川の川まちづくり」、こ
こは先ほど副知事さんがおっしゃったように神話の里
ですから、自然や水循環の再生と神話遺跡コースの
ネットワーク化にも関わっていかねばと思っています。

二つの川まちづくりに関わって言えることは、行動
力のある地元の人材を見つけて火を付けて、情熱を
燃やすように仕向けることが出来るかが重要だなあと
思っています。

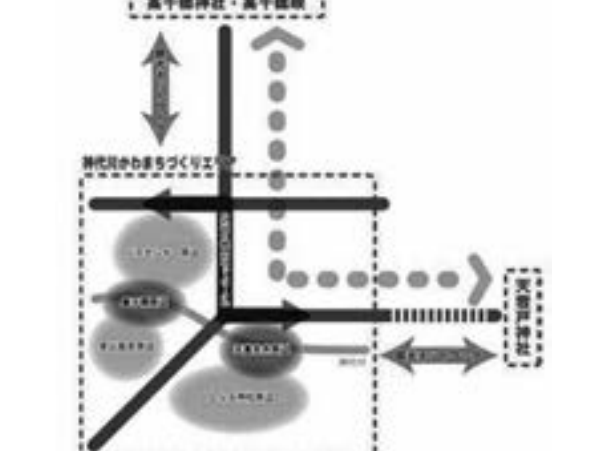
土井: 杉尾先生は、元々宮崎大学で河川工学を教えて
らしたんですが、今はもう河川工学の枠を越えて、環
境とか人作り、まちづくりに活動を広げておられます。

では次は、三橋さゆりさん。三橋さんは現在国土
交通省河川環境課に所属しておられますが、その前
は市原市役所の副市長、その前は、荒川上流河川事
務所長として、女性初の事務所長を務められました。
それで、省内だけでなく、地域での活動にもお強いと
いうことです。

三橋: 延岡は実は2回目です。10年前に一度来まして、
実は走るのが趣味なので延岡は走る街だと思って、川
沿いを走りました。

私は静岡の出身で、二級河川の太田川流域で育ち
ましたのでそこが原風景の川です。平成3年に土木技
術者として国土交通省に入省しました。まず現場に
行って平成5年に本省で係長になった当時、ものすご
く大きな変化がありました。今では当たり前になりま
した多自然型川づくりです。これからは、川は自然と
共生しなければいけないということをたたき込まれま
した。当時係長として中部地方と北陸地方の担当で、
すべての補助事業を「多自然型川づくり」にしないさ
いという指導を受けて、そのように変えていった時期で
す。凄い時代に入省したなあという思い出があります。

それから20年、河川行政に関わって、5年前に荒
川上流河川事務所の所長になりました。先輩からは、
事務所長が一番楽しいポストだよといわれていたのだ



すが、政権が変わって、環境行政は見直しなさいという事で、昨日までついていた予算がつかなくなったんです。地元の市民団体が頑張っている人達とせっかく良い人間関係が出来たのに「ごめんなさい、ごめんなさい、お金がつかなくなると」謝ってばかりいたのですが、所長なので何とかしなきゃと思い、地元の企業にも参加してもらおうと武州ガスの会長さんにお金を出してもらおうようお願いに行ったら上手くいって、市民活動「武州・入間プロジェクト」が企業、市民団体、行政の協力で今も続いています。

それから市原市役所を経て、河川環境課に戻って、今、私が力を入れているプロジェクトは「ライフジャケットを着よう」ということです。「世の中のすべての子どもたちが、川で遊ぶときは「ライフジャケットを着よう」という事を強力に推し進めています。RACはその強力なパートナーですので、これからもよろしくお願いします。

土井: とても幅広い活動ですが、企業も事務所長さん自らに頼まれると、いやとは言えないですね。その辺のコツは後でこっそり伺いたいですよね。

それでは次に、首藤延岡市長に、川との関わりを含めて、自己紹介をお願い致します。

市長: 今日は川を専門とされる方の中で少し肩身が狭いのですが、市長になって9年間、延岡のまちづくりに取り組んできました。これまでは高速道路など遅れていことに、追いつくことに精一杯でした。延岡自体の街の発展が比較的早かったために清掃工場、火葬場、最終処分場など生活に密着した施設が一挙に老朽化しましたので、その立て替えなどにもエネルギーを注ぎできました。

これから先、延岡の街がどうあるべき、どうあって欲しいのか、どんな街に住みたいのかが大事だと思っています。

私は五ヶ瀬川と大瀬川に挟まれた野地町で生まれ育ちましたが、学校にはプールが無く、水泳の授業は五ヶ瀬川でした。川の危険性を少しでも減らし、川と

親しめる街にしていきたいなあと「川まちづくり」に取り組んでいます。2月には「延岡花物語」を開催しましたし、「筏（いかだ）下り大会」は40回目となり、これだけ続いている「筏下り」は延岡と北海道の豊平川だけだそうですが、豊平川は今年で終わりと言うことで、延岡の筏下りが最長となります。川を楽しむイベント、川を通して楽しめる街にしていきたいと思っています。

土井: 自分達が住みたい街を手に入れるということはとても素晴らしい事だと思います。「川まちづくり」の中でも国土交通省の方々が丹念に地元の意見を拾い上げてくれて、延岡市職員の方も、その実践に一生懸命体を動かしてくれています。そんな実践を重ねて行く事で生まれてくるのがたくさんありますが、市長さんの思いもみんなで共有しながら次のステップに行けると良いなあと思います。

それでは、先ほど基調講演を頂いた竹村さん、お願いいたします。

竹村: 私は熊本に3歳までいて、転勤で11都道府県に住みました。一番思い出があるのは、3歳から18歳まで住んだ横浜の大岡川です。汚い川、狭い川ですが、橋の上から見てみると染め物工場から七色の水が流れてきてきれいだなあと思っていました。

転勤が続いて、何処の川に行っても全部、私の思い出の川よりきれいで文化をもっていました。先日、講演で横浜に行ったら大岡川に鮎が登って来るというんです。今、大岡川は底が見えるんです。「まいったなあ、故郷の川を亡くしたなあ」と思いました（笑）。もう土左衛門も流れてこない、きれいな川になってしまっていました。

でも逆に、汚い川で育ったので全国の川を分け隔て無く見れるのかなあと思っています。講演の中で言いましたように、私には故郷がないというコンプレックスを感じながら、川の行政をやっておりました。

土井: 先生は小さな故郷でなく、大きな日本という故郷をお持ちなので大丈夫ですよ。

それではこの5名で進めて行きたいと思います。

今回の全国大会のテーマは、『『伝統的な川文化』を継承する体験活動』となっていますが、このテーマの4つのサブテーマが、基調講演、先ほどの実践事例発表、明日の分科会へとつながって議論される事になっております。

4つのテーマ

・「川遊びのススメ」～川と教育

・「川文化と継承」～未来に残す川づくり

・「川とまちづくり」～川を活かす可能性

・「川と防災」～水防災と地域力

について議論を深めたいと思います。

まず、最初の「川遊びのススメ」については、長良川で様々な経験を積んでおられる名和さんから、少し映像を使って具体的な説明を頂きたいと思います。中でも、学校とずいぶん連携して頑張っておられるのですが、実際は、学校と連携するのはとても難しいんです。学校の先生方はとても忙しいしということもあって。

名和: 明日の分科会に繋げるような話と言いますと「学校と上手く付き合う方法」とか「保護者を味方に付けるには」ということですが、30年間「よい子は川で遊ばない」というのが徹底されて子どもも大人も川から離れてしまいました。私の地元でも水難事故もあります。それで逆に「よい子は川で遊ぶんだ」ということを学校の先生方や保護者に徹底して話しています。子どもは、「してはいけない」と言うことは隠れてやります。だから事故が起こります。川を知らずに川で遊ぶことが危ないので、日頃から川での現場体験を積んでいることが大事です。私達は1cmでも水があるところでの活動には、すべてライフジャケットを着けています。これは子どもたちにも安心感を与えているようです。

学校現場の先生方は、昔に比べると本当に忙しいです。それで先生の負担を軽くし、私達「川の指導者」が活躍できるよう、実際の活動までに4回は打合せを

します。川が好きそうな先生とは一緒に下見にも行きます。こちらで現地調査の報告書なども作成して、学習指導要領にもリンクするように、入念なプログラムを組みます。

まず、ライフジャケットの付け方から指導して、少し寒い時期には川流れでなく、子どもたちには水際から水深の危ないところまで水温を感じながら歩いてもらいます。ロープを張って、それに沿って歩かせることもあります。

土井: これは授業の中での活動ですか。

名和: 総合学習の時間を使いますが、5年生だと理科の時間でもやっています。

土井: 学校の授業と組むようになったきっかけは何ですか。

名和: 実は今写っている学校は、1年から6年まで、各1クラスしか無いんです。春の遠足の代わりに何かやりたいという相談を受けまして、1、2年生は川の石で遊ぼう、3年生は木工、流木でなにか作ろう、4年生は水辺の生き物調査、5年生は流れる水の働き、6年生は河原の石で標本作り、RACの学校連携コーディネーターのテキストも活用しながら進めました。

土井: 遠足を川に親しむ活動に変えたというのも一つの手ですね。でも実際はこんな時の安全管理はかなり大変だとは思いますが、三橋さん、ライフジャケットのことをおっしゃっていましたよね。

三橋: 4月に河川環境課に来まして、水難事故が続いたんです。調べたらライフジャケットさえ着てたら助かったらうという事故ばかりなんです。何故着けないのかを調べると身近にないんです。普通のホームセンターなどにビーチサンダルと一緒に並んでいて、そこそこ安ければもっと普及するのではないかと思います。それで、メーカーや大きな小売さんと一緒に大きな展開をしたいと動いている所です。

土井: 昔、RACのライフジャケットの子ども用は、2000円でとても安くて良かったですね。今は少し値上がりしましたが、どこからの支援を受けてまた、

安く手に入るようになると良いですね。ただ、性能も大事ですね。

三橋：そういうところを RAC さんに研究して頂いて、役所だけが「着よう着よう」と言ってもダメで、作る人、売る人みんなが協力し合ってやらなければダメだなあと、作戦会議を始めています。

土井：杉尾先生の所はいかがですか。

杉尾：私の所は川での活動は 4 年生以上しか対象にしていません。3 年生以下はやってはいけないと言うことをやってしまうので、安全管理ができません。もちろんライフジャケットは全員着けますが、足りないときは RAC や子どもの水辺協議会から借りますが、費用が掛かるので苦勞しています。

土井：RAC さん、無償で借りられるようになる助成金をどこから引っ張るということは出来ないでしょうかね。段々ライフジャケットが広まると、学校現場もそうですが、道具があることで安心感が広がりますよね。それにふさわしいスポンサーなども、RAC さんの方で頑張ってもらえると良いですね。

土井：では次に「川と文化の継承」未来に残す川づくりについて、これば、川文化の宝庫である五ヶ瀬川の事などについて、首藤市長お願い致します。

首藤：文化は神話や伝説とも密接に繋がっています。ニニギノミコトとコノハナサクヤヒメが会った笠沙の岬が愛宕山だと言われていますが、その二人から生まれた、山幸彦（祝子の命）が産湯を使ったのが祝子川だという伝説があります。漢字では祝う子どもと書きますが、まずやらなければ行けないのは鮎梁（あゆやな）だと思っています。300 年以上の歴史がありますが、今、鮎資源の減少という問題があります。私の子ども時代は年間 100 トンくらい捕れていたのですが、今は 1/10 以下になっています。

昔は民間が鮎を掛けても十分にペイしていたのですが、今の水揚げでは難しくなって 4 年前からは公費の投入もしながら、観光資源である鮎梁の存続を図っています。しかし鮎が捕れなくなってしまってもうにも

なりませんから、300 年続いた鮎梁を守るためにも、資源の保全にも取り組んでいます。

それ以外にもなんば引きや、畳堤も川にまつわる文化です。先ほど熊本の白川流域リバーネットワークの方が、台風の時に川岸にコンパネを立てて土嚢で留める写真の紹介がありましたが、これは畳堤の現代の姿だなあと思いました。延岡では堤防に仕掛けがしてあって、近隣の人が畳を持ち寄って畳をはめ込んで川の氾濫を防ぐという、防災の文化です。これを後生に語り継いでいくことも必要だなあと考えています。

土井：昔の人がやってきた事って、かさが張らなくて合理的ですね。杉尾先生、築師さんの仕事を検証されたんですね。

杉尾：築に公費を投入するには、説明責任が必要だろうと、大学の実験室を使わせて頂いて、今の築の掛け方は力学的に説明がつくのかを調べてもらいました。以前は、3 箇所築が掛かっていたのに、今は 2 箇所、台風が来ると流れてしまうので、力学的に検証したら、とても合理的な構造でした。築師さんは親から習って受け継いでいるのですが、理にかなった物でした。皆さんの今日のプログラムの表紙に築の写真がありますが、これだけ大きな築は他になく、延岡が誇れる川文化だと思います。ついでに言うと、北川には霞堤が残っています。全国には霞堤はたくさんあったんですが、何処も閉めてきました。霞堤は総合的な流域治水技術です。江戸時代からの河川伝統工法ですが、逆に河川生態環境的に見ると最先端の治水技術だと思います。洪水と共生する形で、田圃を遊水池にして、そこに絶滅危惧種も多いのですが、流域の人は少し高台に家を建てて住んでいます。

土井：竹村先生、こういう伝統的な物は、今でも理にかなっていますよね。でも、残していくのは難しいですね。

竹村：日本の中で残していくのは難しいんですが、じつはその技術は途上国では求められていまして、途

上国の治水だけでなく上下水道技術、日本の ODA で 30 億円、40 億円の技術を使って投与しているのですが、5 年くらい経つとプラントの内部の部品が壊れて替えるのに、日本のプラントメーカーの人が飛んではいけない、途上国ではそのお金が払えないので、放ってあるというケースがたくさんあります。治水も全く同じで、途上国で求められているのは、日本の昭和 30 年代、40 年代の技術です。だから日本の伝統技術の保存は、日本のためでなく途上国のためにやらなければ行けないなあと強く感じています。メーカーは、出来ません。コンピューターに入っている最先端の技術しか売りたいんです。ですから地方で伝統技術を守って、さっき工業高校の土木の生徒さんが「なんば引き」の技術を習得していましたよね。これはとても大切なことだと思います。

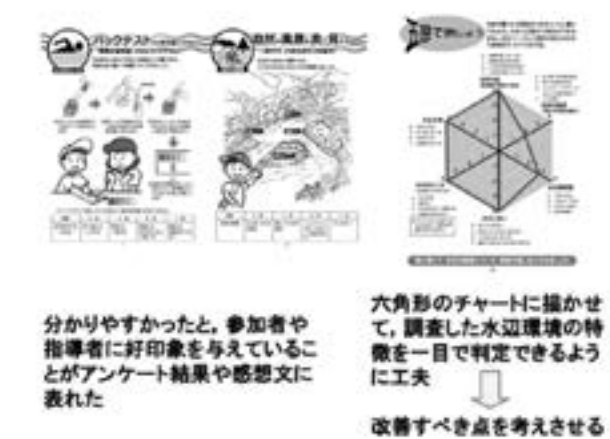
土井：そうすると延岡工業高校の卒業生が伝統工法をきちんと身につけていくと、日本の地方から途上国を救うという新しいプロジェクトが立ち上がるかも知れませんね。

ところで、先ほど鮎資源が減少しているということがありましたが、三橋さん国土交通省としては、そういう環境については、どんな考えをお持ちでしょうか。**三橋**：実は国土交通省は環境に関する細かなデータを沢山持っているんですね。水辺の国勢調査とか。まずはそれを活用していただくと良いですね。

土井：どこから鮎が激減したかというようなことがデータから分かれば、その年に起きた変異から原因がつかめるかも知れませんよね。それでは次のテーマに行きたいと思います。「川とまちづくり」川を活かす可能性ですが、これは、五ヶ瀬川だけでなく、高千穂町の神代川の「川まちづくり」の委員長を務めておられる杉尾先生から口火を切って頂きたいと思います。

杉尾：2 つめのパワーポイントを出して下さい。やはりまちづくりとなると施設、箱物が出て来ますが、その前に川との関係性が体の中に刷り込まれていない





といけないのではないかと思います。市長さんがプールが無くて川で泳いだというのは、まさに川の思い出が体の中に刷り込まれていると思います。それは行政も考えていたようで、私達の NPO が立ち上がったときに、子どもたちをもっと川の環境の良さに触れさせるために、水性生物調査だけでなく、川を計る物差しが出来ませんかということで作ったのが、宮崎県独自の五感による水辺調査です。それをもう10年続けていますが、昨年度の集計で宮崎県全体で、2454名の子どもたちが参加しています。データーは宮崎県のホームページにも載せています。リスク管理ということで、学校の先生の使用も想定して、指導者マニユ

アルも作りました。そこには下見のこととか、小学生なら5人に1人大人がつきます等書いてあります。大事なのは結果を六角型のダイアグラムに書いてもらって、悪いところが一目瞭然で、それを子どもたちに考えてもらう事にしています。調査が終わると学校からデーターが送って来ますが、必ず感想文がついてきます。子どもたちの書いた感想文です。自分達の所の川が、ものすごく良い川だと分かったなどと書いてあると、嬉しいですね。こういう事で子どもたちに原体験が刷り込まれていくと、宮崎に良い川が残っていくと思っています。

土井: 川まちづくりを進めるにはまず、子どもたちに川の素晴らしさが心の中に、入っていることが大事という事ですね。

杉尾: 一つ忘れていました。川まちづくりというと、良い人材を見つけてそこに火を付けて、情熱を燃え上がらせるのが大事ですが、その時に心の中に川での原体験が残ってないと燃え上がらないんじゃないかなあと思います。

土井: そうですね、私も自分が子どもの頃のあの川の楽しさを伝えたいという思いが原点です。名和さんの所でもマニュアルとかシートだとかを用意していませんか。

名和: 国土交通省と環境省が同事に出しています指標生物が、今年、見直されましたよね。水性生物から水の綺麗さを調べようということと同事に、五感を使ってというのも国土交通省も推進しております。それを参考に、新しく下敷き等も出来ておりますので、それを学校関係や私達の活動でも利用しています。国土交通省からの生物指標の冊子もあるのですが、それは濡れるので、後で配って、下敷きはずいぶん活用させて頂いています。

土井: うちもその下敷き、ずいぶん頂いています。RAC 関係者の方以外は分かりにくいかもしれませんが、河原で石の裏をめくると、そこにいるカゲロウの幼虫などの虫の種類から、水質の良さが分かるんです。

石の裏をめくると虫が蜘蛛の巣のようなネットを張って住んでいたり、小さな石を綴って鎧のような巣を作ったりしているのですが、それが調べられて大変重宝しています。これはとても役立っていますので、国土交通省さん、これからもよろしくお願い致します。こういう事もですが、川とまちづくりが上手く連携しているところを竹村さんご存じないですか。

竹村: 僕は今、思いつかないんだけど、三橋さん知らない。

三橋: そうですね、現場に行ってみるんですが、川と街が歴史的にも良い関係にあるって、環境が大事ですよ。九州はRACの参加者も多くて、活動がとても盛んだというのは川の規模と生活が本当に一体になっているからこそ、現場の活動も盛んだし文化も残っていると思います。

土井: そうですよ、ある年齢から上の人に川体験を聞くと、本川でない方がとても多いんですよ。農業用水だったりする。春の小川というような環境は今の子どもたちになかなか与えられない。私達は子どもの頃はざる1個でふさげるような小さな農業用水で遊ぶのが本当に楽しかった。そういう環境はほとんど無くなっていますよね。だから延岡の川まちづくり、大きな所だけでなく小さな環境も考えて行くと、日常の川活動が豊かになっていくかも知れませんよね。この会場には色んな方がお見えですので、自分達の周りの川で少しそんな風にみんなが気持ちを変えると、小さな子どもたちも安全に遊べる場所が作れるかも知れませんよね。そんな繋がりが非常に魅力的な地域を作って、竹村先生のおっしゃった小さな故郷と繋がりますよね。国土交通省管轄の川にはそういうところがほとんど無いんですよ。

三橋: まあでも中小河川もありますので、色んな所で対応していきますよ。

土井: 農業用水で農水省が管轄しているところがあるのですが、そこでは「春の小川事業」というのをこれから進めようとしていますので、この中に農業関係

の方がいらしたら、自分達の周りの「いで」を春の小川のようにしようではないかなどということが広がれば、素晴らしいと思います。では最後のテーマ「川と防災」～水防災と地域力について先ほどの事例発表で、熊本から多岐にわたるコメントを頂いたんですが、これはまず、三橋さんからお願い致します。

三橋: 川に関しては本当に地域力が無いと進まないんです。国土交通省は施設も作りますし情報も出しますし、見回りもするんですが、具体的な水防活動は地域の水防団に任せています。防災白書が毎年出ているんですが、今年のテーマは「共助による地域防災力の強化」です。自助、共助、公助の共助です。最近の災害でも共助が大事だといわれているのですが、逆に言いますと最近、共助の力が弱くなっているという危機感が大きいのではないかと思います。阪神淡路大震災の時に、倒壊した家から助けられた人の8割が、行政ではなくて、家族や近所の人に助けられています。東日本大震災では、岩手県の大槌町というところでは、町長を初め多くの行政職員が津波で流されました。これはもう、地域の力で何とかするしかない状況ですね。釜石では小中学生が、声を掛けながら山の上に登っていった助かったという事例もありますし、最近では広島の大きな土砂災害もありました。避難指示が遅かったといわれていますが、おそらく私も含め全国の行政職員が、もし自分だったらたはたして的確な避難指示が出せただろうかと思っています。それくらい予期しない量の豪雨が狭い範囲に集中した災害だったんです。今、検証作業はしていますが、やはり住民が自分で、雨が振ったら空を見たり、目の前の水路を見て判断するなど、自分で危機管理する事も重要になっていると思います。気候の変化に仕組みが追いついていかないんです。ここでちょっとおもしろいアンケートを見つけました。共助を進めるとき大事なものは①人と組織②物と金③情報。実は一番は人と組織でした、50%の人がこれに○を付けました。二番が情報です。やはり人は宝、人がいれば情報と金はい

てくるんですね。

土井：竹村さん基調講演で祭りをしようというのがありましたよね。

竹村：お祭りはとても大事で、非日常的な活動で気がつくことがたくさんあります。

今、共助ということが話題になっていますけれど、お祭りには地域の有志の方が必ず寄付をされて、それでまかなっているんです。今日の話でビックリしたのは三橋さんがガスの会社の会長の所に乗り込んで談判した、これは凄い事ですよね。行政のお金だけでなく地域の方々の資金と思いきちんとネットワークを組んで引き出す、地域の方々の力を物・金にも活かせる能力が大いにあると感じました。地域を盛り上げるために地域の企業の方々の力を借りるということはこれから必須になると思います。

土井：企業には、お金だけでなく、スキルやノウハウも持った人も沢山いますよね。それも上手く連携が出来ると良いですよ。

首藤：延岡でも旭化成の中に、そういう仕掛けをしてくれていますし、OBの方々も沢山お手伝い頂いているんですが、特別に旭化成ということだけでなく延岡市民ということでボランティアネットワークができています。一番威力を発揮したのは8年前の竜巻災害です。延岡の南部で発生した竜巻が延岡の中心部を通り抜けていきました。その年の初めに危機管理局で募集したボランティアに登録して頂いた方が沢山いましてその時の夏過ぎに竜巻の災害で声掛けしましたら、市民だけでなく建設業のプロの方が重機を出してくれて、翌朝には道路のガレキが片付いていました。共助の大切さは事前にそういう仕掛けを作ることも重要だとあらためて感じています。

竹村：今の市長さんの話を補足させて頂きますと、今日のこのパンフレットを見てびっくりしたんですけど、地域の企業が協力しています。地域の企業にとっても今日のこのような素晴らしい会に協力することは誇らしいことだと思います。こういう形を大事にしながら、

この地域で共助というネットワークを作れるのではないかと思います。

土井：ありがとうございます。実は建設業協会から一番まとまって応援を頂きました。今日、ご参加の方にも応援いただいた方がたくさんいます。

もう時間がなくなってきて、パネリストの皆様ありがとうございました。皆様が思っていることに沿わない事もあったのでは無いかとも思うのですが、この4つのテーマはこれからみんなで考えて行かなければいけないことでもあるし、これを進めて行くことで自分の故郷と繋がる意識を持ったり、市長さんが言われたように、自分達の故郷に誇りを持って住むことが大事なかなと思っています。

今、川まちづくりは市民の意見をたくさん入れながら作って頂いています。実は60歳以上の方々は、川遊びとか川に対する思いを沢山持っていっぱやるんです。思いだけでなく、川で遊ぶノウハウやスキルも沢山持っています。この方達が亡くなるとまた川での実践の積み重ねが、ゼロからということが随分ありますが、そういう方々の顔も会場に何人か拝見されるのですが、そういう方々のノウハウを若い方に繋げることも、是非していただきたいと思っています。

みんなが関わり合ってこれからの故郷、水郷延岡を作っていけたら素晴らしいと思います。本日はつたない司会で申し訳なかったのですが、また、交流会に残って頂ける方、明日も参加いただける方、それぞれの先生方に、ご質問していただけたらと思っております。本日は本当にありがとうございました。

交流会



交流会

会場
ホテル メリージュ延岡

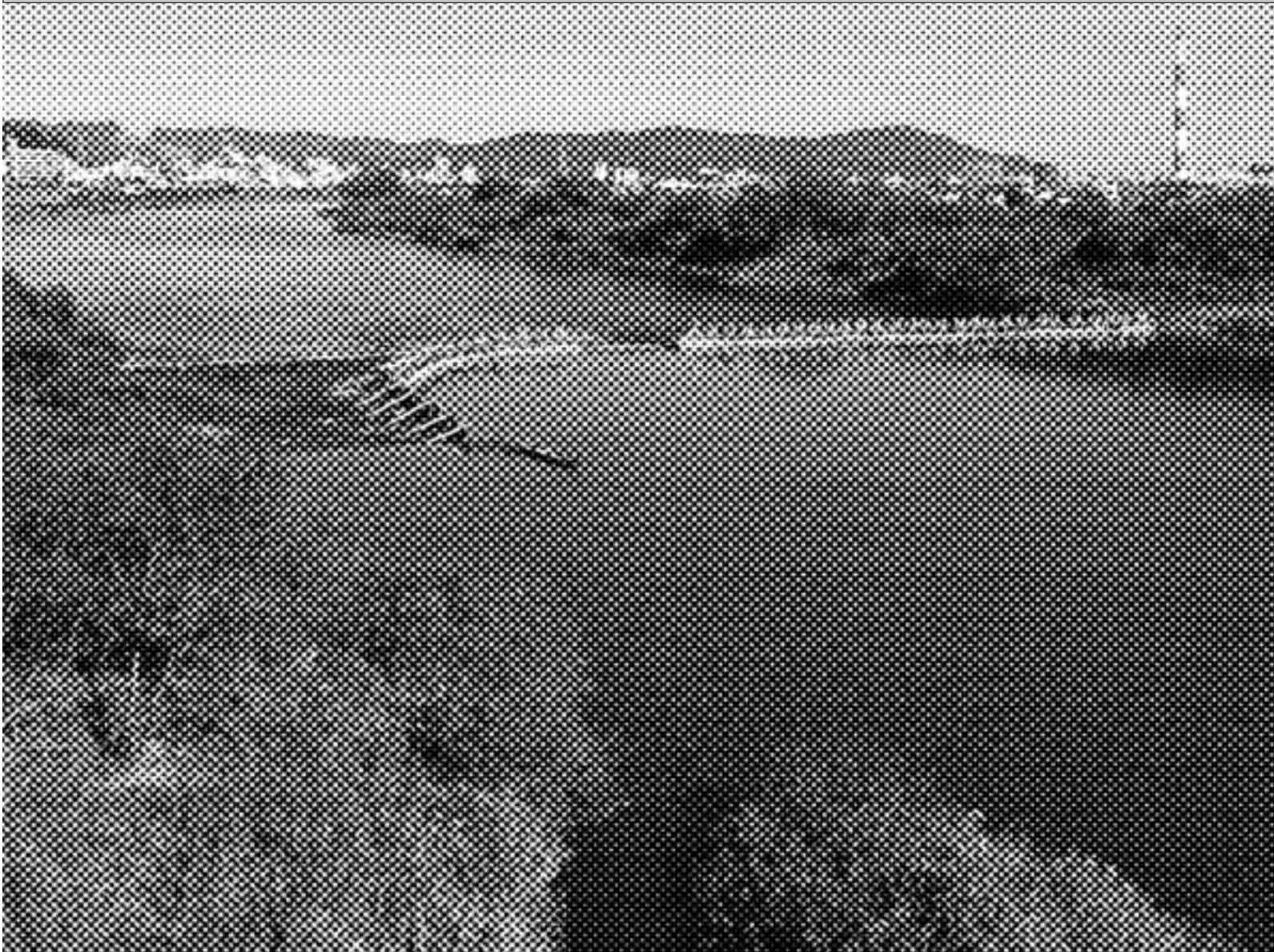
- 司会 大杉 千弘 (NPO法人 五ヶ瀬川流域ネットワーク)
- 小田 純子 (NPO法人 みずのとら BELL 隊 : 熊本)
- 挨拶 楠本 敦 氏 (国土交通省九州地方整備局延岡河川国道事務所 事務所長)
- 乾杯 大田原 宣治 氏 (宮崎県県土整備部 部長)
- 余興 ひょっとこ踊り (橘ひょっとこ踊り保存会)、豪華景品じゃんけん大会
- 万歳三唱 成崎 聡 (全国大会運営委員会 委員長)



第2日目
9月21日(日)

会場
社会教育センター
2F 研修室

分科会
全体会



日時

2014 年 9 月 21 日 (日)

話題提供者

西胤 正弘 氏 (玄海グリーン&アドベンチャー共同企業体)

コーディネーター

吉野 英夫 氏・梶井 恵子 氏

記録

今泉 茜



西胤 : 指定管理で青少年施設を運営している。「かぐめよし」はその中の一つ。市が実施していた「紫川大冒険」を施設が引き継いだ。シンプルに「漕げ、歩け、泳げ」が基本にある。

事前研修で上流域の青年施設に集まって仲間意識をつけ、10日間のプログラムに入る。

22.4キロの紫川で行っている。手すり、柵がない川。昔はドブ川だったが、きれいになった。北九州市は年間1万人以上がカヌーに乗っている。

事前研修の1泊は、仲間作りが大事。河口から、カヌー、徒歩泳ぎで上流に上る。初日は動きが鈍いが、2日目からはだんだん目線も上がり、動きが良くなる。4日目は川の講談をしてくれる。5日目は「かぐめよし」の自然を目指し、6日目に源流にたどりつく。特に難しい事はしていない。やる事はシンプル。最初は二度ときたくないと言われても、数日後には来年も…と思われたら成功。

吉野 : RAC は子どもの活動を学校方面に広げている。

齊藤 : 学校連携コーディネーターを作っている。使用している特別な言葉があり、それを理解することや指導要領を読み解く必要がある。財団が学校事例をまとめた冊子、資料 (水教育ガイドライン) を活用している。子どもに向けて、使う問いかけから使う単語の選び方も考える必要があり、それらをまとめている。学校リーダーをまとめている。学校の先生が RAC リーダーに不足している部分のみを抽出し、コンパクトに RAC リーダー資格が取得出来る仕組みを作っている。プールがなくなり、教員試験で泳げない先生もいる。そういった事も想定する必要もある。

吉野 : 遊びの中で、本当の生きる諸感覚を身に付ける。その感覚が本来の生きる力だと思う。子どもの頃は遊びが非常に大事だと私は思っている。社会全体として「水辺遊び」をもっと活発にして、それが RAC の発展に繋がればいい。

甲斐 : 東海東 (とうみひがし) 小学校はリーバーパルに近い。自然観察、カヌー、バードウォッチング等を行っていて歩いて行ける立地が非常に大切。リスクマネジメントが出来ているかが大事。

名和 : 先生は忙しい。負担を減らし、打合せで納得してもらい、安全管理、信頼関係が大事。PTA も巻き込む。事前の打合せ段階で信用を作る。はじめは大変だけど、実際に関係者に体験して貰うといい。

吉野 : 「単元」、「本時」って分かりますか? そう言った用語が分かるかで違う。実際に河川管理者の出前授業は一方的で子どもの方に入っていない。小学校は45分区切りに慣れている。そのサイクルに沿ってあげないと学校は受入難い。

牛島 : 「単元」は学習内容の一まとまりで100時間位。「本時」はその一時間分。学校はいろいろ葛藤がある。

地域教育委員会の力が大きく、青梅市は入っていけない。市は川の発展を進めたがる傾向があるのでやりやすい。

川に入り、生き物が採取出来るだけで子どもには魅力。そこから発展はさせやすい。四年生が捕獲した生きものを2年生に見方を教えてくれる。最近の国語は総合の下請けみたいになっている。観察したものを文章化し伝え、表現する。すると、2年生が見方を覚え、2年生らしからぬ観察眼、表現力が発揮される。先生やゲストの先生ではだめ、子ども同士だからこそ。一方4年生は生きている物を見ているので、図鑑や死んでいる物ではダメ。昨年の子がやった捕り方を5つ位マニュアル化していて伝えている。マハゼのウンチひとつでいろいろ広がる。ウンチを顕微鏡で観察するとか。だだ、効果は抜群だが、採集をする為には様々な議論を要する。

吉野 : 色々な事例があるが、そういった学校展開の中でいかに RAC のスキルが発揮できるかが大事で、考



えていく必要がある。

参加者 : 中学校は教科担任制で教科が完全に独立する。教科をまたいだ学習が出来ない。また、フィールドが近くにないと辛い。学校は全員参加が基本。西胤さんの事例の様に施設・組織がかっちりしていると羨ましいが、予算がネックになる。費用が高いと助成金がないと困難。中学になると自分の教科、部活動で休日を使うし忙しい中で出来ない。

吉野 : 学校の校門から出るのは非常にリスクがあり、非常にハードルが高い。予算の面で言えば、河川整備基金で学校に対応している。前払い制で使いやすくなっており、活用すると良い。

山田 : 教育委員会の中でサポートの仕事をしていた。実は教育委員会の中からのサポートでもフォローが難しかった。予算付けがなかなか出来ない。こちらで様々なメニューを示しても、担任・学校の興味ややる気で決まるので、難しい。教育委員会で一泊の事業はやるように支持している。それは、出来合いの施設・プログラムに乗っけるので、学校・教員は楽。

参加者 : そういった教育委員会だったら良いが、そういった教育委員会ばかりではない。土木、教育委員会のたらい回しにあった。事業を増やしたくない。保護者から誰が責任を取るか問われると学校側は引込む傾向がある。そこで、安全面を示す事は大事。

吉野 : 教育は継続が大事。今後も続けていきたい。川教育の中で総合的な生きる力を今後も育てて行きたい。10年すれば、今の子が大人になり、さらに10年したらその子どもが大人になる。つまり、20年続ければそれはその文化となっていくと考える事も出来る。

田中 : 今、国交省は文科省 (環境省とも) と連携をはじめ川の教育に働きかけはじめた。

吉野 : 国の動きに頼らず我々の市民サイドでもどんどん働きかけたい。

分科会②「川と文化の継承～未来に残す川作り」

場所
研修室 2

日時
2014 年 9 月 21 日 (日)

話題提供者
岡 佑平 氏 (NPO 法人芦自然学校)

コーディネーター
藤芳 素生 氏・奥松 秀樹 氏

藤芳：川づくり自慢や、まちづくりについて皆さんで
提案していく会にしたい。

昨日話された中で、延岡工業高校なんば引き、五ヶ
瀬川「清流日本一」などの紹介があった。

今回は、地域の歴史などを見直していく。

＜自己紹介＞

奥松：地元延岡の土木事務所に所属

相馬（青森県 小川原湖学校）

西尾（福井県）：キャニオニング等の活動をしている。

今日は川について勉強したい。

佐藤（延岡市土木課）：昨日は、後輩の工業高校が発
表した。

原（大分県 松本技術コンサルタント）：ネコヤナギを
川に植えることを行なっている。

松村（大分県）：国交省地域づくりアドバイザーを昨
年していた。

坂井田（NPO長良川レンジャー）：川原の清掃活動。
川のマナーキャンペーン、小学校と連携して、水質調
査など活動。

矢野（国土交通省 大分河川国道事務所）

豊国：福岡在住、大分出身。仕事を通じてかわまちづ
くりをしている。

坂本（宮崎河川国道事務所）：昨年まで、延岡河川国
道事務所所属。

志賀（延岡河川国道事務所 河川副長）：延岡では川に
熱心な方が多く、いい川があると実感している。

岡（京都府 NPO芦生自然学校）

木村:大阪出身。奈良に天孫降臨の地があること、五ヶ
瀬川に興味あることから参加。

梶野（延岡土木事務所）

志田：港の町が故郷

その他 RAC 合計19名



岡：大阪育ち、8年前に京都に引越して、現職に至
る。美山川（146km）が舞鶴日本海に注ぐ。

茅葺の家が一番多い場所。美山川は芦生原生林が源
流。鮎、やまめ、うなぎ、ウグイがいる。

・2012年全国清流めぐり「きき鮎会」で 準グラン
プリ受賞。よしのぼりが見られる。

・美山川の川沿いに集落がある。川は、台所であり、
漁場、子どもの遊び場である。本川、支川の水を生
かした稲作が盛ん。

・10年前から河川環境が急変し、大雨により、すぐ
に川が濁流になる。理由は、鹿の食害により植物が
食べられ、山肌が洗われた。川に砂利、土砂が堆積。
川環境が変わった結果、雑魚が少なくなった。また、
ナラ枯れにより町内の約8割が枯れてしまい、新しく
植えても鹿の食害により育たない。その為鹿の食害
を防ぎながら苗を育てて植えている。

●対策として

美山クリーンリバー作戦：川の清掃（軽トラ20台分を
撤去）を、漁協と地域の方で行なう。

どんぐりマザーツリープロジェクト：鹿の食害に加え、
なら枯れ問題を抱えている。虫の侵入を防ぐために、
フィルムを張る。

・自然体験としての美山川では、親子の学習機会とし
てのラフティング、川の安全学習などを実施。

・鮎がとれなくなったことは、漁協の経済的危機。ま
た、川鵜による被害も甚大だ。美山川の将来に向け
て鮎に依存しない 美山川の魅力の発信をしていく。

・地域を“誇り”に思う、引っ張っていく人が必要。



相馬：小川湖はワカサギやウナギが生息する、青森
県で一番凍る南限の湖。

・冬は、湖が凍り、一般の方もワカサギ釣りができる。

・日本海と太平洋を持つ唯一の県。

・日本海側と太平洋側気候が違う。太平洋側は雪が降
らない。

・雪がふるところの方が、意外と暖かい。雪降らない
方が、放射冷却で寒い。

・ナンバーワンではなく、オンリーワンを目指す。

・地域づくりの3種の仁義 わかもの、ばかもの、よ
そもの。

・鹿、イノシシがいらないので食害なし。

藤芳：キーワード 日本一、自然環境。

坂井田：長良川は清流を目指している。160km 河川、
岐阜市42万人、流域人口80万人、そういった地域を
流れてもなお清流。

・江戸時代から、VIPしかとれない漁場あり。

・環境省の名水100選、水浴場100選。

・第3者の権威付けがないと、話題にならない。また、
それがあることで地域の人がそれに対して誇りを持ち
やすく、守る為のプレッシャーが生じる。

・昨日は、延岡豊提のDVDを見せてもらった。木曾
三川にもないか調べてみる。

・清流長良川を後世に引き継ぐ取り組みを行なってい
る。メンバーの高齢化などにより、学生次世代の後継
者をつくっている。

志賀：延岡へきたばかりですが、工場地帯、市街地
を流れる川で水質日本一というのは、地域の財産であ
り自慢していいことだと思う。

矢野：水質日本一など、外向けのアピールをもっとし
て良いのではないか。

子どもたちは川で遊んでいないから、関心がないの
かもしれない。

国の水生生物調査を進めているが、地域の学校1学
校のみで、全ての学校が対象ではない。

相馬：学校の先生をまきこむのがいい。

きれいでも汚くても「自分たちの川」という意識を持
たせるといい。

松村：歴史を子どもに教えることによって、川に興
味をもってもらう。

子どもに川のアンケートを実施したところ、バーベ
キューがしたいという声が多かった。

大人が歴史を学んで、子どもにつたえないといけな
い。和歌山では、源流に木を植えている。 流域の連
携をして、源流を大切にすることが必要。

藤芳：地域が自分を守ってくれる。豊提は外せない。

佐藤：方財地区は以前橋がなく、浜が島へ渡る交通
手段になっており、浜の掘削ができなかった。

下流の砂浜が洪水時に流れの阻害になることから、
自分たちで豊提を設置して、自主防衛をしていた。

木村：揖保川の豊堤は高く、昭和28年に起こった洪
水で地域を守ることが出来た。

豊提はコンクリートの節約にもなり、設置費用を低く
抑える事ができる。

藤芳：地域地域によって原因が違うため、つくりが異
なる。

松村：大分市は洪水が多い。河口部の軒下に船を所

有している家庭がある。

奥松：北川には霞堤がある。北川の地域特性や、地元を理解した上で活動する。

田畑は洪水流入を許容するため、家屋を水の浸からない高い場所へ移動した。

氾濫する地域に湿地があり10年前に希少な動植物がいることが分かった。地元の方が主体で、湿地を守っている。北川流域には、住民で川を守っている（外来種除去など）習慣がある。

氾濫が起こることで湿地が守られていることも分かった。マイストーン作戦など、漁協が川の環境づくり。

木村：川ごとに残る伝統と文化や1種類の生物に伴って発展した生活習慣や文化を継承していく必要がある

共同作業により発展していったコミュニティも伝統として残していく

原：祝子川には多くの伝説があり、様々な解釈がなされている。伝統だけでなく、こういった伝承なども伝えていきたい。



木村：川に歴史あるは習慣がくっついている。お祭りなどの共同作業がそうだが、祭りが無くなると共同作業がなくなる。

原：昨日の「祝子（ほうり）川」という字は読めなかった。神話に由来している名称である。歴史、神話を学ぶべき。

松村：子ども達にもっと、歴史を学ばせるべき。

＜文化の継承まとめ＞

○青森の小川原湖は、流れのない場所、オンリーワンを自慢。

○境田さん：誰もが理解できる第3者評価を発信。

○ライフジャケット：川に接するための安心感を与える。

○松村さん：大人が歴史を勉強し、後世に伝えていく。

日時

2014 年 9 月 21 日 (日)

話題提供者

田中 謙次 氏『おしゃれな「リ・BAR」』

コーディネーター

宮尾 博一 氏・杉尾 哲 氏

記録

山中 康二



＜自己紹介＞

鳥越：五ヶ瀬川での国交省の活動の補助を3年間取り組んでいる。御船川（熊本）の実行委員会に関わっている。

仙石（南阿蘇寺子屋アドベンチャー）：キャニオニング等の川に入っでの活動を展開。

北林：東海大学近辺の西春校区で川流れ体験などを、地域の方々と共同で実施。

鶴羽：延岡でのまちづくりに取り組み、橋の日を設定して30年目。

菅原（河川財団所属）：子どもの水辺サポートセンター。学校教育に河川教育を取り入れること、水難事故防止に力をいれている。

水内：新潟県見附在住。川に親しんでもらうため、子どもたちの E ボート体験等を実施。

楠本（国土交通省延岡河川事務所 所長）：川まちづく

りに取り組んでいる。

小野（都城大淀川サミット）：個人の別組織が集まった組織。国土交通省との川まち作り。

黒木（延岡市土木課）：国、県と五ヶ瀬川の川まちづくりに取り組んでいる。

国際ソロプチミスト：リバーパル五ヶ瀬川の支援活動に取り組んでいる。

小田（延岡土木事務所）：民間と連携して、自然を活かした川づくりに取り組んでいる

共和コンクリート：公共事業に景観資材を提供している。

田中：出身の福井県（北陸）は、琵琶湖のある滋賀県、石川県、京都に挟まれている。環境文化研究所に勤務、川の体験活動など楽しみながらやっていこうという目線で取り組み、活動の幅を広げているところであり、本日はその一つの例を発表。

・『おしゃれな「リ・BAR」』では、川をプラットフォームにして、川の専門家ばかりでなく、普段川とは関わらない人も含めて、既存の宝物、物と物を繋いでいく活動を展開。特に未婚の若い男女をターゲットとして、前に進んでいる事例である。

（4分のスライドショー）

・『おしゃれな「リ・BAR」』は、川で BAR をやることで、川の魅力を創造して若い人たちに来てもらうことが狙い。子連れのお母さんにとっても「ここなら行ける

という安心感を持ってもらえるよう、そんな効果も期待した。

・今回は3回目の実施。それまでは大きなイベントの前夜祭のような感じでやっていた。水辺のオープンカフェ、癒し体験、コンサートなどを通じてまちづくり推進、環境保全併用を目指した。実行委員会が観光協会などと連携して実施。

・平成23年国交省から河川空間のオープン化について規制緩和があり、川で営業行為をして良いことになっ

たが、できることのほうが少ない。隅田川、大阪北浜などにそのような施設が作られた。

・3年前から短い時間でやっていたが、今年は金、土、日の3日間で実施をし、目標1500名のところを2500名が来場。

・少子化・定住化対策としての視点が根本の目的で、観光から環境保全のツーリズムへつなげていきたい。
・賑わいを創出することで、緑地公園を利用した水辺の観光ツーリズムを創り出す。噂が噂を呼んで、人気スポットとなっていく。



・プロのバンドに来てもらい、JAZZ系の音楽を会場に流す。飲食店ではプロのおもてなし。子どもも楽しめるように、タイヤチューブ下りや、ボートなどが出来る様にし、大人たちはそれをカウンターから眺めて楽しめる。

・4月から立ち上げて実施に向けて準備した。アンケート結果の集計や反省会などをし、イベントだけで終わるのではなくきちっと振り返ることをした。

・市民団体、イベント会社、地元の高専、漁協、コンクリート製品会社、大学、靴カバンショップ、FM局、観光協会などが、実施団体として参加した。

・新潟県見附市、熊本など、全国から視察も来た。
・ツーリズムを目指しているの、営利的なところをビジネスとして、収支をプラスにすることにチャレンジ。

・福井工業大学産業ビジネス課と手を組み、大学の研究課題としても活かされた。

・アンケートの結果、ツーリズムでやるとしたら、カヤック、マラソン大会などはもちろんだが、のんびりした

空間、カフェ、みんなで団欒などができる川のスペースを求める声も多かった。

・実施した結果、こんなところとは知らなかった、川の雰囲気や印象が変わったという声があった。人の賑わいがあることで印象が変わった。

宮尾：川を活かしたまちづくりとして、日野川は資源としてどんな特徴を持っているのか。

田中：日野川は特徴的な所はなく普通の河川。駅から10分以内に川があり、川のすぐ横に丘陵があり、上から見ると駅や山や川が見えてロケーションが良い。誰もが気軽に行ける場所。水量が多い川ではない反面、子どもが安心して入れる。昔に比べて綺麗になってきている。

宮尾：川の立地条件がよく常設化でき、ビジネスに繋がっていかうという事例。

小林：日野川は人が集まり、水量など川の状況もよいようだが、護岸の整備状況はどうか。我々の川は葦が茂っていて、いいアイデアはうかぶが、それを実施するところまで行かない。

田中：階段式護岸の河川公園で、人が入りやすい。草が生えてくると流域住民や役所が得意分野で協力しながら、草刈を担当したりする。河川敷は指定管理制度で芝生管理などもされている。

・薪や炭を使用するのはダメ等、火を使うことを嫌がり、営利目的だと通らないことがよくある。ツーリズムを実施する時に行政とのトラブルはなかったか？

田中：キャンプを推奨し、火の使い方（地上50センチ以上でコンロ使用など）をルール化した。発案者としての同じテーブルに行政も入っていたので、反発もなかった。

杉尾：水辺リングが始まり、川の空間を営利目的に使えるようになっている。

国交省：河川占用については「何でもやっていいよ」ではなく、「地域活性化のために地元の自治体のまちづくり」の視点を絡めた上で空間を利用しようということであれば、営業活動もできる制度。

国交省：延岡でもこの制度を使って協議会を立ち上げ、公平性、平等性を確保しながら営業活動できるようにしている。宮崎河川事務所、観光戦略課に相談したらいい。

杉尾：『おしゃれな「リ・BAR」』の取り組みはなかなか良いが、仕掛け人は誰なのか？

田中：川でバーやると面白いかな、ロケーション的にいいな、という考えから始まった。流域で活動している団体に投げかけて、最初の2年間は予行演習のような事をしてノウハウ蓄積をし、3年目に入って大きくどんと実施をした。「そうだ川へいこう」からも繋げ、若者に焦点を当てて絞った。対象が明確化し、戦略的に考えやすい。

ビジネスとしては、各店舗とも黒字経営だった。実行委員会もお金をとってギリギリで黒字。1日でも雨が降れば赤字に転落する。

広告手法としては、チラシ配布、中刷り広告、フェイスブックで全国に発信するなどして集客した。県外からも来客があった。参加者比率については現在アンケートの集計中。

広告ではプロの手を使ったのが良い結果となった。中刷り広告は普通莫大な費用がかかるが、協賛をいただいた。3日間で1500人の目標に対して2500人が来場。

宮尾：川の地域資源を活かしたまちづくりには、よそ

にはない地域資源を活かすこと、きっかけを作る人がいること、みんなで笑顔で川を楽しんでいること、ビジネスとして繋げる事などがキーワードとなる。

荒木：延岡市の取り組みとして特区を持って実施している。大瀬川の鮎やな（10月1日から開催）で期間限定で使用している食事処を、通年利用が出来る様にして人が集まる場所を作れないか、協議会を立ち上げて進めている。23年の緩和を受けての実施。大瀬川にある「鮎やな」というもともとの資源を活かす。5月には試行的にカヌー下りをした。夏場にはキャンプをするなど通年で許可をとり、継続してやるのが前提。地元の人が連携していく必要がある。今年度、工事発注をして来年3月にはインフラの面が完成予定。

宮尾：河川改修の計画に合わせてこのまちづくりプランを実施。占用する側だけでなく役所も同じテーブルについて一緒に取り組んでいるいい例。

水内：見附市では平成16年の水害があり、大雨の時に堤防が切れてしまうため、曲がっているところの堤防を真っ直ぐにして、空きスペースに川の駅を昨年度に作った。市民が日常的に交流し、休憩し、物産品を売るお店やレストランがあり、ゆっくり話しながら交流できる場所。芝生広場がヘリポートになっており、防災倉庫が併設されていたり、防災拠点でもある。1年間に94万人が来場。

杉尾：神代川（高千穂）の「天の真名井（あめのまな井）」という神話の場所は、観光に生かされていない。高千穂峡や天の岩戸は知っているが、街の中にそんな場所があるとは知られていない。3面コンクリートの神代川を自然再生で作り直そう、そこを拠点にして街の中を人を歩かせようという見直しがされている。地元の行動力のある人物を見つけ出し、キーマンになれ

るか。延岡の人じゃダメ、地元の人でないと、内部が燃えない。地元の資源を活かして、地元の中心人物になりうる、川まちづくりを。

宮尾：地域資源を活かして、地元の人に関わり、自分たちの地域に何があるのかを探ししていく。地元の行動力ある人物が動き、人材作りや発掘をしていこう。

常田：30年前に延岡でまちづくりの動きがあったとき、宮城県の仙台市と姉妹河川を結び、その歴史がつながってコンサートをしたり、歌を作ったりした。ボランティアとして参加していたが、自分達も先輩たちの活動を見ながら知らないあいだに活動していた。

宮尾：昨日の発表で60歳以上のノウハウやスキルを活かしていくべきという話あったが、若い人を呼び込み巻き込んでいくことを、年配の人は意識してやっていく必要がある。

土井：83歳のお婆ちゃんの例。年配の層の中で眠っている人材を探すのも大事。

小野：竹とんぼ作りなど、きらり人を発掘しようという動き。ボランティア登録制にして、小学校の活動等に関わる存在があったが、担当者が変わっていつの間にかなくなった。10数年前になくなった制度を、今掘り起こそうとしている。人びとの生活・文化と直結しているところがある。田中さんの話も若い人たちをターゲットとして活性化させ、生活や飲み文化とつながっている。

宮尾：それも地域独特の資源。川を眺めて楽しむだけでなく、川の中に入って五感で感じながら、川を楽しむという視点がある。そういったRACの役割として、何が出来るか。

田中：RAC指導者は川のある社会作りの1つの面を担っている。安全教育、カヤックなどの表舞台だけでなく防災、地域の社会づくりがあり、そこに気がつくことが大事。我々に出来ることはまだまだ沢山ある。RACに関わる人たちが得意技を掛け合わせ、楽しい活動を作っていく。新しいものを作るとき、歴史や文化はついてこないの、そこに無理やりくっつけて、



意味づけをする。

宮尾：川で死亡事故などがあると元も子もない。RACの視点から川での安全な遊び方、安全管理の仕方は絶対必要。その視点を常にもってまちづくりに関わっていくべき。

・地方に産業を興すということを阿部政権は推奨しており、川の産業は成り立つのか。

・カフェやバーの営業を始めたあとのことが心配。サポート期間が終わったあとにきちんと回るか、継続していけるのか。営利活動をする場合には生活のことも直接関わる。

田中：『おしゃれな「リ・BAR」』ではリスクの分散化、顧客の分散化についても考えており、冬場は居酒屋を集めてやってみようかというアイデアがある。対象が変わる。1人が負担を強いるのではなく、皆で負担する。ひいては皆にとつての河川活動環境が良くなる、それに賛同する人は手を挙げてください、と言ってリスクも込みで活動をしている。利益とリスクが365日の2～3日ずつに分散化される。儲けではなく、お

客さんに川で楽しんでもらうことを喜びとして展開している。

・いろいろな市民団体、会社、漁協、観光協会など幅広い連携が取れていることが大事。小さい連携では活動が広がる範囲も狭い。それに伴ってお客さんの範囲も広がる。人のネットワークは、川でビジネスをやろうという時には重要。

田中：10万人単位のイベントより、福井で生ビールを一番売り上げたイベントとなった。

宮尾：地域の少子化対策につながるかどうか、見通しは？

田中：福井工業大学と流域団体が連携し、リバーでビジネスをしようという「リバビズ大学」を、カリキュラムの一つとしてプロジェクトを進めている。結婚して子ども2～3人は育てられるかな、将来のために川をよくしていこう!と若者が思えるような、川をプラットホームにした環境作り。都会に出る人を1組でも引き止められればよい。

宮尾：これをきっかけにして縁が繋がった人がいるかをアンケートで取ると、画期的な事例になる。延岡でもそういうことにつながらないか。

・地域資源を知らない人が多い。地元に誇りを持てれば行動力につながり、そこに呼び込もう、伝えようということになり、達成するといいいスパイラルになる。

・コスタリカ(エコツアーのメッカ)で活動をしていた。実施できるのは乾季の3ヶ月間だけ。亜熱帯地方なので冬は暖かいので冬場のビジネスも出来る。日本では冬場の寒い時期、特に川辺では風が冷たく、年間を通じた継続性はあるのか。

・延岡では河津桜が割りと早く咲き、桜や菜の花を堤防に植え、梅が咲くお寺があり、お茶の接待をするなど、2月の14,15日にイベントを実施した。かなり寒い時期にも関わらず、JRと提携して実施し、3万5千人が来場した。今年は2ヶ月で3回に分けて実施しようということになっている。出来ることからやっていこう。

・思いつきだけでなく、一つの大きな人的ネットワークや場をしっかりと作って、地域と行政が一体となって実施する仕掛けが必要。自分達の夢を掲げないと、ベクトルがその方向に向かない。

<総括>

・自分たちの地域資源を見つめなおせば、特に川の資源には独自のものがあるはず。

・行動力のある人材作りの面では、若者を呼び込み巻き込む。

・地域の中から、ノウハウを持った人物を発掘していく。

・川を楽しむまちづくりという面では、水難事故は絶対にあってはならない。そのためにRAC指導者が貢献すべき。

・少子高齢化の中で、いかに継続して川まちづくりやリバービジネスを展開していくか。川をプラットフォームにして、地域の誇りもつ仕掛け作りをしていく。

日時

2014 年 9 月 21 日 (日)

話題提供者

吉野 くに子 氏「佐波川で遊ぼう・学ぼう」

コーディネーター

山本 隆利 氏・金子 好雄 氏

記録

今泉 茜

吉野：主に親子を対象に、川遊びの楽しさと怖さを知り、体験してもらいたいと、「しんすいせんたいアカザ隊」として活動中。アカザは川魚の名前。子どもたちと一緒に川の安全講座、レスキュー体験、防災活動などを行っている。

現在の佐波川はとてもおとなしい川だが、昔は暴れ川だった。講座では、国土交通省の情報室を利用してジオラマを使ったりして、佐波川が氾濫した時を想定したワークショップ等を実施した。防災訓練などにも参加し、洪水があった時のことなどを考える機会もあった。

緊急時に聴覚障がい者に向けて使える防災サインなどをみんなで考えた。

先日の豪雨災害を経験し、これまで活動の中で得た様々な体験があったにもかかわらず、一步も動けなかった。でも出来ることをやっていこうということになり、益々防災に力を入れていくことになった。砂防堰堤のジオラマと紙芝居を作っているいろいろな場所で P R をしている。川のハザードマップに合わせた観光マップなども作成した。様々な手法で防災に力を入れていく。しかし、アカザ隊は川ガキ。川が好きなので、楽しい活動を続けていきたい。

山本：活動の中で「川で子どもたちを遊ばせて、危ない箇所を実体験してもらおう」ということをやっていた

が、「川で子どもたちを遊ばせる」ことの中で、どういうことに注意をすべきか。

参加者：危ないことがあったら大人を呼んでこい、とあったが、川に関する知識がない一般の大人であれば、より危ないことになりかねない。消防を呼ぶなりすべき。スローロープの使い方なども、映像からは間違った使い方をしている箇所があった。正しい指導をすべきである。

参加者：いざという時に専門家が近くにいるとも限らない。そのためには、日頃からの P R 活動をして、幅広く市民がいざというときに動けるようにしておくべき。P F D やヘルメットを持ち歩くなど、対策は必要。

参加者：基本的にはその通り。自分の身を守るための基本知識、道具、技術を持ち合わせていることがベスト。車のシートベルトと同じで、普段からもしもの時に備えることが重要。基本中の基本であり、この意識を広めていかなくてはならない。

山本：R A C での全国大会もそうだが、こういう場を生かして指導者を育成していくことが大切。日頃から子どもたちが川に親しむ、川に接する機会が多くあるとよい。

では次は、災害があった場合に、どんなことに注意すべきかを考える。

参加者：佐波川の上流にはダムがあり、放流するときはサイレンが鳴ったりお知らせがくる。増水して川が氾濫するようなこともない。四国の吉野川の早明浦ダムでは、大雨が降るとダムを放流し、下流のほうが 12 m くらいまで増水した。ダムが決壊した時、下流を気にする余地もなく放流してしまう。そういう事態を考えておかなければ、ダムのある地域では厳しいのでは。



国交省：ダムについては誤解が多い。ダムの上流はもっと雨が降っている。少しずつダムで放流しながら、調整するという働きを持っている。流域が広いので下流ではかなりの流量になるが、決してダムのせいではない。水位 30 cm の増加までなどの規制をかけながら放流し、水位調整もしている。サイレンやネットからの情報などをうまくキャッチしてほしい。

参加者：会津では 130 人程度の会員の中で、自分のホームグラウンドの川で、上流の雨量によって下流域ではどのようなことが起きるのか、その現状を会員に知ってもらう機会を設けている。正しい情報を知っていくべき。

山本：ダムの下の方に「今〇〇トンの水を放流している」などの表示がある。「トン」がどのくらいか分かりますか？川を管理している人はトンという一つの単位を使う。1 秒間に水が流れる量を「トン」で表している。でも人々にとっては何センチ水位が上がるか、が重要。情報の意味としては、「予測値」として表示できるといい。

被災を受けた時、そのような状態になった時、どういことができるのだろうか？延岡には「畳堤」というものがある。畳堤を守ろう会の皆さんは、防災とい

う切り口でどんな活動をしているのか。

五ヶ瀬川の畳堤を守る会：畳堤は昭和初期から、川中地区の約 2 キロの範囲で行われていた。河口部分が L 字型に曲がっていて狭いので、増水した場合にば塞（せ）き上げ」現象が起こり、水位がかなりのところまで上がってくる。それを解決するために畳堤を使っていた。民家の普通の畳などを使っていたが、畳の大きさが違ったり、うまく機能しないことなどがあり、今は使われていない。しかしとても丈夫なものなので、補修して使うことはできる。啓発活動として DVD やマップや紙芝居を作ったり、歌を作ってみんなに分かりやすい啓発活動をしたり、サブレ（お菓子）を作ったりして、現代の子どもたちに伝えている。畳堤の畳を堤防に並べて防災の道を作ろうなど、国交省との動きもある。C D は YouTube で誰でも見ることができる。

山本：地域が水災害から土地を守ってきた歴史を、子どもたちに向けた水防災の材料として使うことができる。日頃から地道に防災教育をしていけば、より身近なものとして理解できるのではないかな。

延岡でも近年たくさんの水災害を受けている。実際に被災を受けた時に何もできなかったという話があったが、実体験や事例などはあるのか。

参加者：五ヶ瀬川が氾濫した時、92歳の母は外から急いで家にあがったが、あっという間に床上浸水をした。何年もの間、川の氾濫による被害が多かったが、現在は改良されて少し緩和されている。

参加者：広島の大災害でも多くの被災者が出た。延岡にも、大きな4つの川が1つに集まる五ヶ瀬川があり、日頃から防災に関する知識を得たり、考えたりしておかなくてはならない。被災地に向けてどんなことをしておくべきか。

参加者：大雨が降るとすぐに増水する。足腰の弱い高齢者にとっては、すぐに逃げることは不可能。「近所」で隣同士で助け合っていこうというところにスポットが充てられている。地域でお互いに助け合おうという文化。それもやはり日頃の付き合いから生まれてくるもの。

山本：いざ災害の時には情報を確認したり、公助を受けたりということがあがるが、それ以外にこういうことをやっておいたほうがいいのかはあるか。

参加者：ネットで各観測地の水位がどのくらいか情報を得られるそうだが、実際に動いているのか。川が増水した時に堤防の門をしめ、ポンプで中の水をくみ出す装置があるが、使っているところを見たことがない。

国交省：毎年河川事務所では動くかどうか点検をしている。いざという時に動くように、日頃から管理は

山本：台風が来て水の逆流があり、水門を閉めることができなかったことがあり、裁判になった事例もある。増水して門をしめて、内部の水をポンプで出すと、今度は下流の地域がくみ出された水によって浸水するということもある。そういった装置や設備が整ってい

るからといって、必ずしも安全とも限らない。施設管理者などがいろいろな管理をしているが、局地的豪雨などが発生している昨今では、施設対応では追いつかないということが起きている。だから今、「水防災と地域力」ということがテーマなのである。自助、共助に関してはとても大切である。

参加者：防災サインなどは活用すべきであると考えます。具体的にどのようなものがあるのか。

参加者：本当は国際的に標準サインがある。標準のものを覚えておくべき。

吉野：サインがいくつもあってはダメなので、基本的にはリバーサインを使う。手話をすべて覚えるのは大変だが、リバーサインならいざという時に身内ですぐに使える。私たちが「手話もどき」を使うから、聴覚障がいを持った皆さんも一歩歩み寄ってね、という意味合いを込めて作ったもの。また、聴覚障がいの皆さんはいざというときに声を出せないで、笛を持っているのは基本。

・夏に親子での講座を開いた。お父さんお母さんは川に入らないという世代。それでは川に入って遊ぶ子どもを守れないので、親子で積極的に川に入って身をもって体験してもらったところ、一番楽しんでいたのは保護者だった。

金子：活動をいている私たちは分かっているが、防災に関してはやはりわかっていない人が多い。また、自分は被災しないと思っている人も多い。まずは意識を変えることが必要。絶対に災害や事故は起きると想定。大丈夫と思っではいけない。

北川：兵庫の都賀川で急激な増水があり、11人の子どもたちが川に流された事故があった。ではほかの人たちはどんな風に助かったのか。地元の住民が「ここ

はすぐに増水するから逃げろ!」と事前に声をかけていたことが助かった原因。地域力で助かったという事例。では日頃何をしておけばいいか。知識や技術をもって活動している我々が、日頃から地域とのネットワークを作っておくこと。

栗駒山での災害があった時は、山や川の地域の人たちが、海の人たちに助けてもらったという事例がある。そういう助け合いの形があり、日頃から育むことができる。

山本：事故や災害があったときに地域に係ることも大切だが、最近は何かあると「ボランティア」を募集する。そういった体験の中で気づいたことなどあるか。

吉野：被災後にすぐにボランティアセンターを立ち上げることができなかった。ボランティアを志望する問い合わせは多かった。そうこうしている間に県の方でセンターを立ち上げた。ニーズ調査もなかなか間に合わず、ボランティアを派遣してもニーズと合っていないかったということもあった。

参加者：延岡は平成11年に台風被害があった。ボランティアに行くと被災者から色々な意見を聞いたが、一つは被災した地域で、いざというときのネットワークを作っておくべきだったということ。もう一つは被災時の公的な救助を受けるときの体制を確認、認識しておくべきだったということ。単純にボランティアだけでなく、地域のいろいろなネットワークを使って力を合わせて解決していくことが必要だという話だった。

山本：筑後川で平成24年に災害があった際、各地区のボランティア活動の実施状況を調査した。久留米大学、佐賀大学の共同調査があった。その際に感じたことは、社会福祉協議会は事前にマニュアルを作ったり、トレーニングをしていて、被災があった時にも

すぐに対応していたこと。

災害になる状況（雨量が何ミリになったら洪水になるなど）を知っておくことや、子どもが水遊びをするときにどんな箇所が危険なのかを知っておくことが、日頃から必要。情報を得られる媒体も多いので、それも活用する。

＜まとめ＞

- ・まず自分が生き残ること。自助力のアップ
- ・地域の弱者を助けること
- ・普段からの地域内コミュニケーション力のアップ
- ・流域間（違う流域同志）での連携
- ・行政や中間支援組織や企業の支援の必要性

司会進行(NPO法人 鶴見川流域ネットワークング)
平山 康弘



第1分科会 (吉野 氏・梶井 氏)

吉野: 皆さん、ご苦労様でした。遊びと教育というテーマで行われたセッションの概要をお伝えします。総勢27名という大所帯、自己紹介の後、西胤さんの10泊におよぶ子どもたちの体験活動、紫川の下流から源流のある福知山まで歩いて踏破という学習の取り組みの情報提供をして頂いた。

遊びと教育というところで、子どもへの取り組みは学校現場との連携が必要ではないか、ということでRACが取り組んでいる学校連携について斉藤事務局長から情報提供をして頂いた。

それらをベースに参加者の方々から意見・情報提供を頂いた。地元の小中学校の先生、牛島先生(嶺町小学校)から実際学校現場ではどのように行っているのかということに参加者に知ってもらった。

参加者の大半は、学校との連携は目新しいもの但也有り情報提供だけに留まってしまった部分もあるが、印象に残ってるのはRAC側から学校に働きかけという事例を名和さんから詳しく改めて聞くと、やはり確信は「日頃から学校の先生たちと連携を図り、最終的に学校側が信頼感・安心感を感じると連携が継続していく」ということだった。

RAC指導者としてその辺に努力が必要だろうと感じる。4年生が捕った生き物を2年生に授業する。縦割りの授業で、生の生き物を使った体験型授業。スライドや写真ではなく生の生き物を使って上級生からの説明されることで観察力が高まり国語だと作文などの表現力が向上したり、5年生では生きているものを図鑑で見るよりも実際に手に取って見てみることで観察力が高くなったりと素晴らしい教育効果がある。

我々が勧めている体験活動は非常に大切なんだなと印象に残った。地元の先生から、学校で取り組むには全員参加が大原則。課題としては、川へのアクセス、外部から講師を呼ぶ時の謝金等の金銭問題が永遠の課題になる。

学校との連携は教育委員会との連携も大事。田中課長補佐より、本省としては文科省とも連携をし、川の教育を強化していきたいというお言葉を頂いて第一分科会を終えた。

梶井: 高学年が低学年に、自分が体験したものを絵等を使って詳しく教えるということは低学年の子どもたちの興味関心を惹かせる授業が出来る。

先生たちの考えもしなかった「魚がしたうんちを顕微鏡で見る」といった子どもが興味を持った事を行っ

たら発見があったなど、学校教育の中で絵に書いたような授業ではなく実際に子どもが体験した発見と驚きが自分の身につく、という体験談がよかった。

社会教育課で応援してもらえばという話が出ていたが、各地で対応の仕方が違う。

河川整備基金など、上手に活用して授業を取り組んでいく必要があるのでは。

第2分科会 (藤芳 氏・奥松 氏)

藤芳: 郷土に誇りを持った川づくり。その文化をいかにして次世代につないでいくか。第1分科会の遊びと教育、そして第3分科会のかわまちづくりに活かすために間を埋めようと話をしました。

課題は「自分たちの誇り」。トータル19人参加者。京都の岡さんから清流美山川の文化と生命を守る取り組み。原生林の中で鹿の食害で下の植生が失われ、それにより土砂が川に流れて来るようになった。流域の地域の自然の保全が川の保全と一緒にいる。

つまり美しい川を守るためには上流の植生も含めた保全を行わなければならないということで、全体を通して環境保全についての取り組みの話をしていただきました。

大きなポイントとしては「〇〇の誇り」、細かく言うと「歴史」「自然」「日本一」。まず「日本一」を先に出して日本一の清流五ヶ瀬川と言ってはどうか。水質だけでなく、総じて綺麗な川なので。これを日本一と言ってもいいだろうと思う。

「オンリーワン」を考えると小川原湖で例えると水産物「ワカサギ」「しじみ」などの日本一をアピールすることで郷土、川への誇りをアピールしていった、それを一つの誇りとして地域がまとまっていく、といったことをやればどうだろうか。

また「自然」、京都大学の演習林。原生林の保全と

川の保全。あるいは自分たちの地域の豊かな湿地をどのように残していくのか。

「歴史」竹村さんのお話で堤防で川を押し込めていたその川づくりを行う中で、地域を守るために置提や霞提を作ったりと地域を守るために様々な工夫を行ってきた。

その前を考えると神話、古(いにしえ)の時代から堤防の話は歴史上様々な形で言い伝えられている。その地域の伝承・歴史・神話の話し、あるいは水に関わる祭り水神様もそうですが、祭りも様々行われている。

地域の3つの自然・歴史・日本一に関心を持って誇れるまちづくりに繋げていく。それによって地域を楽しく誇り高いものにしていく。その一つの突破口としてやっていきたい。

「誇り」とともに「地域を引っ張る人材」「アピール」。3つの誇りが出てくれば地域に火を付ける人も出てくる。地域の火付け役をみんなで持ち上げ、周りも一緒に盛り上がって行動していけばいいと思っている。今朝、地域の人たちが橋を清掃していた。やはり地域に誇りが持てるということが自分の地域に目を向けることに繋がる。地域に誇りが持てるということが重要なのではないか。

奥松: 人材作りの大切さの討論に一番時間をかけた。川の面白さ厳しさを大人・子どもに伝える一つのやり方として、大人も子どももまだまだ歴史を知らないが、その学びを深めることによって新しい何かが見えてくるのではないか。

昔、川が交通路であった時代の歴史を大人が知り、子どもたちに伝承する事で、川、流域の面白さ不思議さ、大切さを学び、そして伝承していく。川の文化を語りついでいく。地域の歴史を学ぶことを意識的に行うといいのではないのか。

第3分科会（宮尾 氏・杉尾 氏）

最初に、福井・田中謙次さんからプレゼンをして頂いた。3日間『おしゃれな「リ・BAR」』を日野川で開催し、2500人の人が参加したという。若者向けのBARを河川敷で行い昼間は酒を飲みながらその前で子どもたちが川流れなどをして遊んだりタイヤチューブなどで川遊びをするようなことを行った。

田中さんは大きな戦略を持って、ゆくゆくは常設化、ツーリズム化を考えている。川の岸辺でどのような形になるかはまだ考え中だが、単なるバーだけではなく、川を活かして若者を呼び込み、外に出ていく事を抑え地域に根付いてもらい地域が活性することを目指したいとのこと。

質疑のなかで、川で営利目的の活動はできないのではないのかという意見があった。

H23.3.8付けで河川敷地の専有許可準則が改訂され、地域活性化を目的とした河川の専有に関する規則が緩和された。単に営利目的全てが許可されるわけではないが、基本的には河川空間がオープン化された。そのような時代の流れもあり、川を活かしていこうという動きになった。

プレゼンをきっかけに各地域の実際の課題が多くありましたが、大まかには5つの共通する課題があります。

1. 川の地域資源を活かしていくべき

例えば、大瀬川では鮎やな。鮎やなを仕掛けている堤防のところに常設して施設を作ろうという動きがある。実際に大瀬川ではほかでは見られない鮎やなという、延々と続いている資源がある。高千穂、神代川で天の真名井（あめのまない）という神話の資源があるが、地元の人知らないで、その資源が活かされていない。それらを生かした自然再生を行うため川の地域資源を発掘する、見つめ直す、探し出すということが重要。

2. 行動力のある人材を育成する

若い人をどんどん巻き込んでいく。年配のスキルを

持ったうもれている方を発掘し、人材育成に活かす。全国大会に参加している人たちはキーマンになりうる。

3. 川を楽しむしかけが必要

福井、日野川ではお酒を交えて、川で遊ぶという仕掛けがあった。どこで何かを仕掛けるにしても、川遊びは欠かせないものである。川を楽しむためにはRACの視点が必要であって、安全があつての川遊びである。

4. ビジネスとして継続性を持てるかどうかが重要

田中さんの例では成立した。しかし、ただの思いつきではなく多くの人を巻き込んで、仕掛けるテーブルを作って、時間をかけてビジネス化していくのが重要。

5. RAC 指導者を地域活性化に活かし尚且つ指導者も地域活性化に RAC の視点で協力をしていく

第4分科会（山本 氏・金子 氏）

山本：トータル40名の参加。最初に、山口、佐波川の吉野さん（しんすいせんたいアカザ隊）から、子どもの日頃の活動や安全教育、避難訓練などを行っている。その活動中で防災訓練を行ったり、聴覚者の方にも分かるように共通のサインなどを決めたりしながら日頃活動を行っている。

今回あった水害では、その取り組みの成果がほとんど目に見えなかった。なぜそうなったのか、どのような活動をしていけばいいのだろうかという問題提起を行った。

特に最近取り組んでいることは、ハザードマップで避難所のマップづくりを行ったり、降雨体験、ジオラマ模型を作って水の動き方を見たりとリアリティを持った材料を使って災害時の対応をトレーニングしている。

川辺で子どもたちが安全に遊ぶためには？

平時の活動で子どもを川へ連れて行きそれを安全に活かすためにはどうすればいいのか？

子どもを遊ばせる時専門家が危険箇所を認識し、正しい指導を行う必要がある。

大人がついていれば安全という意識ではやはり川は危ない。対処法としては、PFD、ヘルメット着用を必ず行うとか、日頃から深い場所を知っておく、川の危なさを十分知っておくなどといった基本的なことを承知している事とその指導者を作る事が大事。

ダムの放流の話が出た。ダムの放流が行われると急に水かさが増えて危なくなるのではないのか？との意見に、ダムの放流ルールについてのコメントを頂いた。被災の時何もできなかったということもあったが、実際に被災してしまったら、普通の人は何かを行うということは難しいのではないのか。

被災した時に一番重要なのは、最近言われている「自助」「公助」「共助」で、自助、共助の視点で、隣近所の人の中で自助ができない人がいるのかいないのか、お互いに呼びかけをし合う、日頃の取り組みが大事だろうという結論になった。

また、ポンプ場はきちんと動くのか？避難の情報はきちんと伝わるのか？という事について、それは公助の観点であり、そのトレーニングは事前に行われているという助言を頂いた。

災害時、その後の対応についてはボランティア活動のあり方、受け入れ方、についても議論された。延岡の豊堤を守る会は、延岡の土地柄災害が多いため、豊堤を題材にDVDやマップを作成し、普及啓発、学校教育に活かしている。

約1000枚の量を使用するが、現在では使われていないとのこと。今後はボランティア活動をするにしてもそういった背景や活動を承知しておくべきであるということ締めくくります。

平山：第一分科会では、学校の授業で、昨日も牛島先生から報告のあったように、上級生が自分の体験

を下級生に教えるということに大変驚いた。そして効果もでるということ。

第二分科会では、〇〇の誇りということで3つのキーワードで自然、歴史、日本一。これらを掘り起こしながら誇りを持てるようにしていく。その中でも人材が大事だという話しがでた。その人がその川の歴史を知っていると、文化、恐ろしさ楽しさを伝えるにあたっ

て歴史を知っているのと知らないのでは随分変わる。歴史をもう一度勉強しなおすことが重要。第三分科会では、川をどうするか。『おしゃれな「リ・BAR」』という事例報告。営利目的でも地域活性化が目的であれば川を利用することは可能ということ。長い時間をかけて川でビジネスを行えるようビジネス化をしていく。また川遊びは重要なので、そこはRACの視点を持って働きかけていく

第四分科会では、水害時にトレーニングの成果が現れなかった。その反省を活かし、リアリティのあるハザードマップを利用したり、洪水の写真などを利用し活動を行っている。また、ボランティアもいざとなったらなかなか動くことはできない。せめて、自助、または隣近所の方くらいは助け合いましょう。

また、子どもを遊ばせる時は災害もそうだが、専門的な正しい認識。RACで言えばトレーニングと同義でライフジャケット・ヘルメットを着用する、危険箇所の把握することができる人がいるということ。ただ大人がいればいいということではない。大きなことから災害時または身近な安全のことまで話ができたと

思います。山本：災害時、ダムからの放流で何トンの放流ということ

を良く耳にするが、実際のところその水量（何センチ程度なのか）がどのぐらいなのか理解している住民の人はほとんどいないと思う。どこの分科会にも共通すると思いますが、様々なプロを活かす。学校連携で費用が必要だとしても自治体が持っている制度を使う。ビジネスにしても参加しているそれぞれの人たち、組織の得意分野を活かし

て行う。それにより、想定以上の効果を生んだ。これは、やはり様々なプロを活かすということに集約されるのではないか。

藤芳：日本の歴史で一番最初に出て来る河川改修は、日本書紀。古から日本は自然災害と戦ってきた。大きな堤防は作ることができない。そのための措置として置提を作り小さな範囲を守っていた。

吉野：学年のレベルに合わせたプログラム作成が必要になるのではないか。知識レベル、体力、発達段階、学校現場の実情などをしっかり見直して学校連携を行って行く必要がある。低学年から活動を行っているが高学年になると川に行くのが当たり前。

会場より

牛島：今年と来年で、学校内部で校内研究をやる。水には入るが河川敷の有効利用を考えている。昆虫の専門家を呼んで講義を開催、20代の先生は、男女どちらも虫を捕まえられない。川も同じで、現体験をしている人が非常に減ってきている。そういう意味ではRACの活動はとても重要。

一般・任意参加であれそのような活動を全国で行うと、それに参加した数パーセントの人が教員になるかもしれない。教員である自分たちが、鳥や魚等生き物、川にいる生物の名前が分からないという現状が進んでいる。生物も歴史もそうだが地道に積み上げていくことが重要なのではないだろうか。

RACの存在は今後、非常に重要視されるだろう。教員を引き込んでいき、面白さを伝え、仲間作りをしていく必要があるのではないか。昆虫を捕まえて遊ぶことの楽しさ、野花を摘んで遊ぶ楽しさを経験していない多く20～40代の教員の自然に対する認識は低い。私たちは原体験を大切に、子どもたちに伝えたいという地域の熱い人々を上手く活かしていきたい。

21年間色んな形でリバーフェスタを開催してきた。大分の教員前の生徒の参加者がボーイスカウト・ガー

ルスカウトの子どもたちと共同参加。リーダーシップを取るのはボーイスカウト・あるいはガールスカウトばかりで大学生は何も分からず、ボーイスカウトに質問の嵐だった。

自分たちが教える立場に立つときそのような交流は大切だと感じたという感想を多く頂いた。その体験から、自然の大切さ等を学び、意識が変わったという事例がある。教員の卵たちにそういった経験をさせる事も効果的ではないのだろうか。

藤芳：RACには学校連携部会が存在していて、学校のカリキュラムを知る学校支援リーダーを作っている。今の学校の先生や保護者の中で原体験をしている人は少ない。学校の先生をリーダーにした、実体験だけを行ってもらう学校リーダーという制度を作ったので、活用して頂ければと思っている。

宮尾：今の政権、国土交通省自体も地方創世・コンパクトシティ化ということが少子高齢化の流れの中のキーワード。地方でどのような産業が創成されていくかが議論されていくと思われる。立場としては、川を活かしたまちづくり、川に関連した産業が出てくることを期待している。

閉会式



閉会式

RAC フラッグ引き継ぎ

山田さんから、南さんと大内さんへ引き渡し。来年は二セコ町で開催予定。人口 4500 人。あるのは山と川だけ。一生懸命頑張りたい。観光客は年間150万人。その魅力は是非皆さんの目で確かめて頂ければと思う。是非宜しくお願い致します。

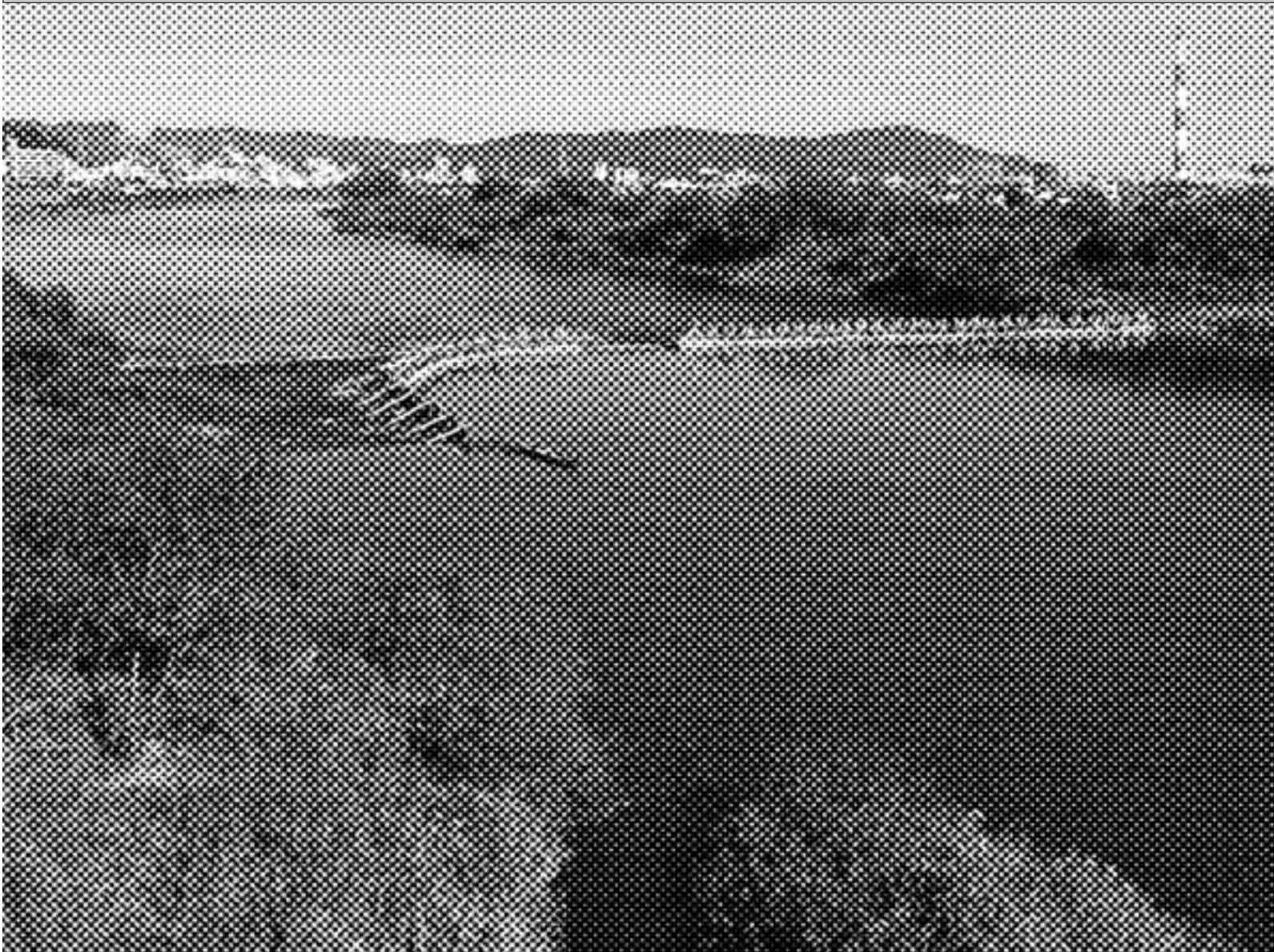


閉会挨拶

杉尾 哲（第14回川に学ぶ体験活動全国大会 in 五ヶ瀬川 副実行委員長）

皆さん、お疲れさまでした。いかがでしょうか？台風16号が来た時にヤバいと思ったが、皆さんの熱意のおかげで中国方面へ避けてくれた。エクスカーションまでお天気が持てばありがたいと思う。
今回宮崎での開催は、土井さんの独断で決まったが、ここまで上手にいったのも五ヶ瀬川ならではの魅力ではないか。山田さんと成崎さんに大きな拍手を。この大会が100回目までいくように、無事地元まで帰れるように一本締め。

エクスカーション



エクスカーショ ン 1 ～五ヶ瀬川 E ボート～

参加者
28名

ガイド
山田 大志 (NPO 法人 五ヶ瀬川流域ネットワーク)

エクスカーショ ン1の五ヶ瀬川 E ボートは、五ヶ瀬川
中流約5. 5 kmを下った。本来は鮎漁の時期と重な
る為、五ヶ瀬川漁協と話し合いを持ったが、全国か
ら来られる方に五ヶ瀬川の素晴らしさを是非体感して
ほしいと快諾を頂いた。

スタート地点の水の透明度に皆感動していた。途中、
豊富な水量を誇る五ヶ瀬川のダイナミックな瀬に圧倒
されたり、滝を眺めたりと五ヶ瀬川の楽しさを十分に
体感できた。

車が何台も通り、E ボートを眺めていた。五ヶ瀬川の
カヌーによる水面利用はまだ本格化していないが、今
後の可能性を感じさせる機会となった。



エクスカーショ ン 2 ～アユのチョン掛け～

参加者
25名

ガイド
中村 浩子 (NPO 法人 五ヶ瀬川流域ネットワーク)

エクスカーショ ン2のアユのチョン掛け体験は、北川
の漁協組合の協力の下行なわれた。チョン掛けは、
先端に専用の針をつけた竹竿を使用して、川で泳ぐ
アユを狙いチョンと引っ掛けてアユを釣る伝統漁法で
川の透明度の高い五ヶ瀬川ならではの漁法である。

参加者は水中眼鏡を着用し、竹製ののべ竿 (北川漁
協組合の方が作成してくださいました) を手に持ち
チョン掛けを行なった。初めは捕れずにやきもきして
いたが、段々コツを掴み着々とアユをチョンチョンと
引っ掛けて釣っていた。

人によっては5匹、6匹とアユを引っ掛けていた。
釣ったアユはその場で炭火焼にして、参加者全員で食
べた。やはり、釣れたては味が格段においしい。帰
りには、参加者全員に、アユ2匹の手土産も頂いてア
ユのチョン掛け体験は終了した。

伝統漁法のチョン掛けを続けるためにも、河川や環
境、文化についてもっと一般の方々が興味関心を向け
られるように活動をしていければと思う。



エクスカーション 3 ～河川文化施設の見学会～

参加者
20名

ガイド
土井 裕子 (NPO法人 五ヶ瀬川流域ネットワーク)

12:50
カルチャープラザのべおかをバスでスタート

13:00 豊堤の碑

昭和 42 年以前の大瀬川の河口は、方財町と砂浜道路（毛なし浜）で塞がれていたために台風がくると町は洪水の被害にたびたびあっていました。豊堤は町の人たちが家庭の畳を持ち寄り洪水の被害を食い止めるために作られました。

豊堤は橋の欄干のように大きな空間があり、その空間から景色を見たり、川風を感じたりします。台風時やいざという時には隙間に畳を差し込んで洪水から町を守ります。差し込まれた畳は水分を吸収して膨らみます。

豊堤は岐阜市長良川、龍野市揖保川と延岡市五ヶ瀬川日本全国に 3 箇所残っています。当時は 2000 メートルにわたり約 1000 枚の畳が使われました。



13:30 岩熊井堰

昔の人はお米を作ることが悲願であり生きることそのものでした。そのために少しでも多くの田んぼを作ることが必要でした。畑から田んぼを作るとは、水管理がきちんとできていなければならないことでもありました。地域では水の大切さを示すように水神様を各箇所ですべて祀っています。また、水にまつわる記念碑もたくさん建てられています。

岩熊井堰は江戸時代にまだ、十分な技術や機械のないときに長い時間をかけてとても苦勞をして作られた堰です。この堰ができたお陰で、この地域ではたくさんのお米を作ることができました。

また、堰の中心にある魚道についてはとても珍しい形をしています。階段のようにできていて魚が遡上しやすいのではないかと思います。



14:10 家田公民館

説明：山中 康二 氏（延岡市土木事務所河川課）

北川は昔から洪水の多い川でした。平成 9 年に大洪水が起こり 1800 戸が浸水の被害を受けました。激甚災害に指定されて河川改修が行われました。河川法が改正されて初めての河川改修事業でした。同時に水防災事業として家田地区の宅地嵩上事業もおこなないました。災害危険地区として新しく建物を建てる場合には 12.7 m 以上でなければ建てられないという規制が作られました。

人の住んでいる家については仮設住宅に住んでもらってジャッキアップして、家屋の下に盛土をしました。平成 30 年までには全ての地区で嵩上げ事業が完了予定です。しかし、この地域は年一回は浸水をしています。その度に霞堤を越えて、肥沃な土砂を上流部から運んできます。

嵩上げについては人の住んでいる家と限定をされています。消防小屋やお店などは嵩上げ事業の対象外です。家が水につからなくてもスーパーなど直接、生活に関わる施設が水につかって大丈夫かと思ってしまうます。



14:30 家田湿原

説明：梶野 哲哉 氏（延岡土木事務所河川課）

北川湿原は延岡市北川町に広がる家田湿原と川坂湿原を称して呼びます。この湿原は絶滅危惧種が 50 種類以上生息するとともに基調な地域です。

希少種の保護のために放棄田など湿原を保護するために掘削をしたりしています。

家田湿原の特徴

- ①全国的に希少種がたくさん生息している。（50 種類以上）
- ②トンボ類が多い、地元が中心となって保全活動をしている。藻刈りや外来種の駆除を行っている。
- ③湿原を守る会がある。地元の団体が中心となっている。

地元の延岡工業高等学校などでは、この湿原で平成 23 年から 24 年まで「なんば引き」で水際に木杭を打ちました。

代表的な絶滅危惧種はグンバイトンボやヒメコウホネなど、そのほかにも珍しいトンボ類や植物がたくさん生息しています。



エクスカーション 3

15:00 北川洪水標柱

説明：黒木 重代司 氏

地域のお年寄りの方々に、当時の話や、水害の話を伺いました。霞堤についての話もお聞きました。北川では6箇所の霞堤があります。昔から霞堤を作っていました。水田については、畦の草刈をしないとミミズが増えて、ミミズが増えるとモグラが増えてモグラのトンネルから畦が崩れて水が溢れてしまうとのこと。

平成9年の大水害時にこのあたり一帯も水没をし、昔からの水害の歴史を忘れないように洪水標柱が立っています。

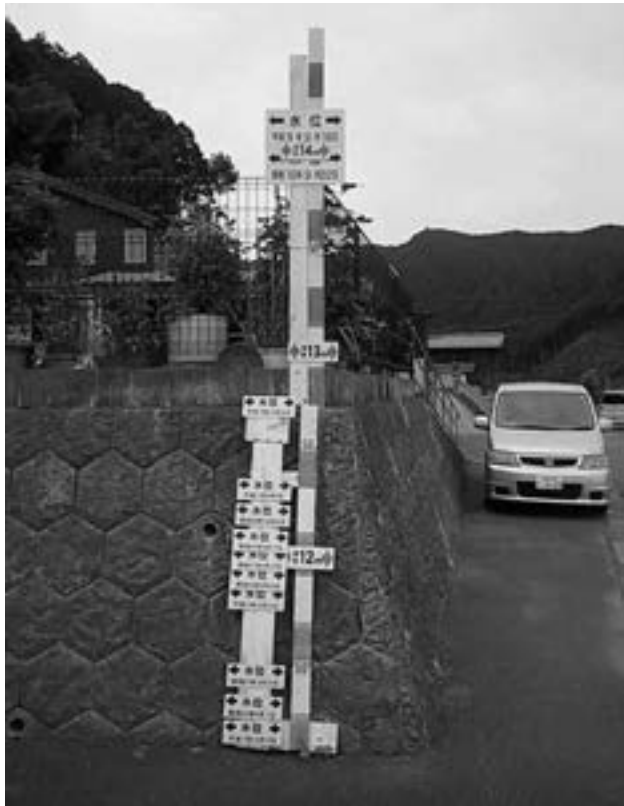
水害時にお葬式があつて、水が迫ってきたのでお婆さんの遺体を布団と一緒に移動したなど、当時の興味深い話をお聞きすることができました。

昔の人たちの生活の知恵を大切に、昔からの言い伝えを守ることが大切だと伺いました。

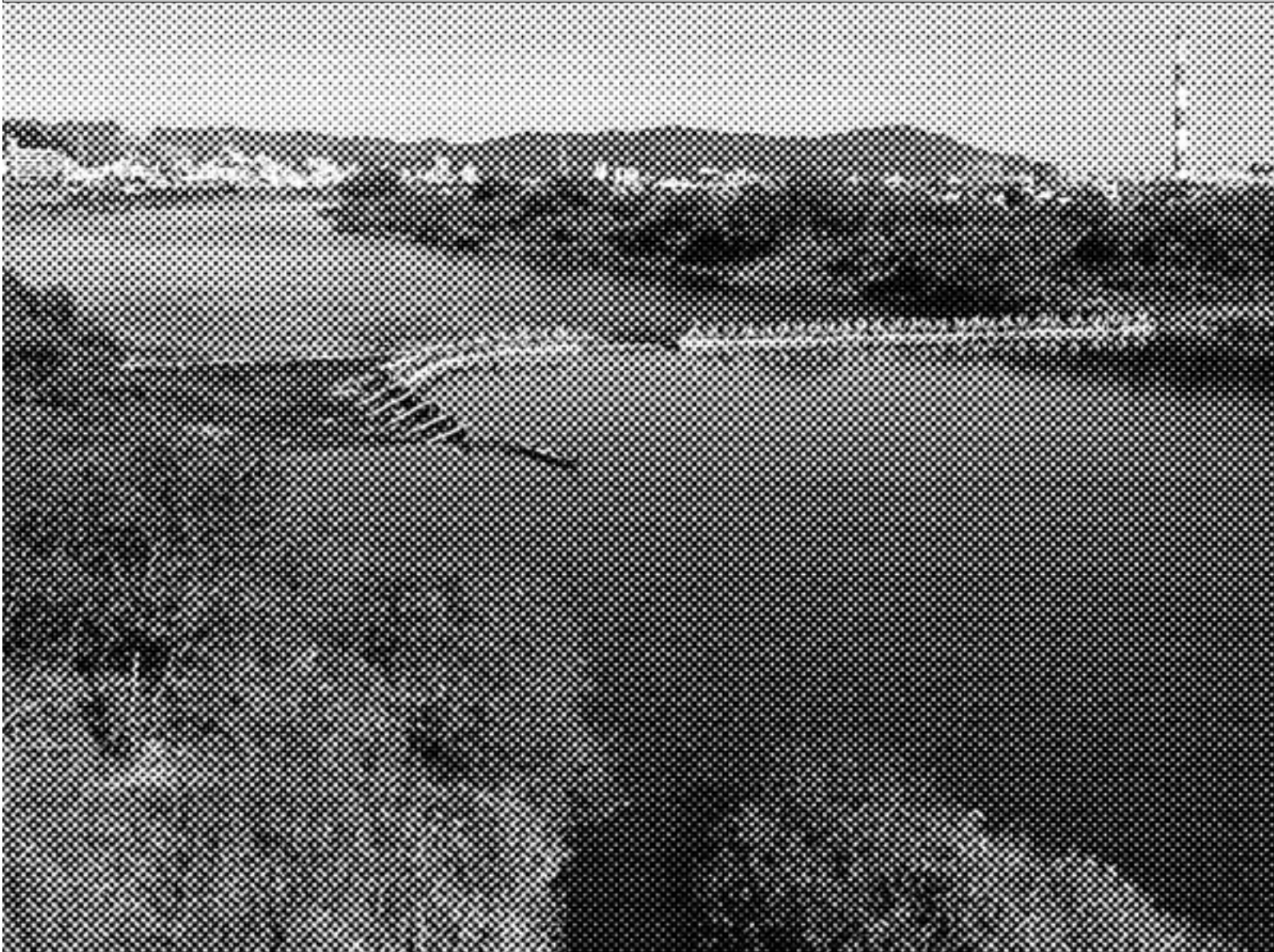
洪水がくるときには山鳴りのような音がして、こおろぎや虫が泣き始めたらもう、水が来ないなど、私たちにはとても新鮮な感じでした。今この時代だからこそ大変な時代を生きて来たお年寄りの声に耳を傾けなければと思いました。

特別エクスカーション
神話の里高千穂の見学会

高千穂くしふる神社



資料



1、始めに

昨年(2019)の10月、新潟県見附市での13回目の全国大会に出席して、初めての行政主導の大会とその進行の手際のよさに、大きなプレッシャーを感じて帰って来たところから今回の全国大会の準備がスタートした。

昔、延岡市は水郷と讃えられ屋形船から三味線の音色が響くような、川遊びの盛んな土地であった。旭化成が立地したのも年間3,000mmを超えていた豊富な雨量と、市内を五ヶ瀬川水系の4つの川、五ヶ瀬川、大瀬川、祝子川、北川が流れ、川の恵みを活用しやすい地形による。しかも宮崎県の北部で太平洋に面し、台風銀座と呼ばれた洪水常襲地帯でもあった。今でも市内に川を横断する300年続く大きな鮎築が掛かり、治水、利水の伝統的な川文化や施設が残る地域でもある。

それで、実行委員会の中で、全体のテーマを『「伝統的な川文化」を継承する体験活動』と決め、「川に学ぶ体験活動協議会」(以降RAC)が力を入れているテーマとも合わせて、分科会の4つのテーマ「川あそびのススメ～川と教育」「川の文化と継承～未来に残す川づくり」「川とまちづくり～川を活かす可能性」「川と防災～水防災と地域力」を決めていった。

開催日を決めるのも悩ましく、RACの全国大会では、参加者がその土地自慢の川で遊ぶのを楽しみにしている。延岡の川は鮎が豊富に採れる関係で直轄河川だけで5つの漁業組合があり、6月の鮎漁解禁からは、五ヶ瀬川、大瀬川では、下流部ではカヌーをするのが難しく、北川は9月からは柴堰漁という特殊な鮎漁が始まるので、やはり下るのが難しい。それで、漁業組合に相談に行き、五ヶ瀬川では少し上流部の五ヶ瀬川漁協が、昔のような子どもであふれる川を夢見ているのでと、カヌーやEボートで9月に下るのを快諾してくれ、北川漁協は、カヌーは困るが、北川独特の鮎のチョン掛け漁の体験で協力してくれる事になった。

また、昨年(2019)の見附大会のようなおもてなしをやろうとすると参加費だけでは、足が出そうで、応援の広告やお酒などの協賛品も集める事とした。

何度かの実行委員会や運営委員会を重ねつつも、7月から8月の初めに掛けて台風が相次ぎ、夏休みに計画していた様々なイベントがすべてお盆以降、9月にまでにずれ込み、なかなか本格的な準備作業を始めることが出来ず、やきもきした。

そんな中、昨年(2019)の見附大会と一緒に参加してくれた、延岡市の企画課、土木課、社会教育課のメンバーや、宮崎県県土整備部、国土交通省などから多大な応援をいただき、とてもありがたかった。

また、オープニングには、地元の東海東小学校が「權伝馬踊り」という千石船が発着する港町として栄えた大武町に伝わる、お正月の祝儀儀礼を披露してくれ、ご祝儀にせんぐまき(餅まき)もしてくれた。

2、目標

ちょうど、延岡市では国土交通省より「天下一五ヶ瀬川かわまちづくり」の計画が認定を受け、具体的な活動を進める3つの部会も発足して、活動がスタートしたところだった。上流の高千穂町でも神代川を中心にした「八百万の川まちづくり」がスタートしていた。それぞれ市民グループが参加しているとはいえ、まだまだ市民に浸透しているとはいえない。

また、延岡市では、水が豊かな分、水難事故も多く発生していて、一夏で5人が川で亡くなってから、市内の川はすべての場所で遊泳禁止となっている。小学校でのプール事故がきっかけで、夏休みのプール開放が中止になり、「ヘルストピア」というゴミ焼却場の余熱を活用した温水プールでも学校行事中に事故があり、子どもたちが水に触れて楽しめる環境は厳しくなっていた。

一方で「青少協」(青少年育成連絡協議会：小中学校単位のPTAが中心に活動)から、禁止したところで水難事故は減らせるのだろうか、川という自然の

理解や川で遊ぶ心得などについての講演会が企画され、私たちが講師を務めたり、安全教室を開催したりしていた。

県内唯一の土木科を持つ延岡工業高校では、建設業者やコンサルタントと協力して「多自然川づくり」を支える伝統的土木工法についての勉強会もスタートしていた。

こんな動きも、この大会の中でより多くの市民に伝えたいし、全国の活動を知ることで川に関する広い視点を持ってもらいたいとも思った。

12年前RACリーダーを養成するためのトレーナーの養成会が初めて開催されたのもこの延岡の五ヶ瀬川であり、その際には今回、九州地方整備局の局長としてご参加いただいた金尾局長も参加いただいていた。今回の局長のご参加は、RACの再認識にも繋がった。

そんなさまざまな思いの広報活動としても、プログラムの広告支援を活用した。広告をお願いする際に、今回の大会に掛ける思いを話しながら、参加も呼びかけた。お陰で一般市民だけでなく広告を支援していただいた建設業者やコンサルタントさんも予想以上に参加していただいた。

3、基調講演

今回のテーマに沿って、川や歴史についての著書の多い、元河川局長の竹村公太郎さんをお願いをし「流域と日本人のアイデンティティ」というテーマでお話を頂いた。

「現在の堤防の工事はほとんどが江戸時代に作った物の補強か改修です。」戦国時代は、敵と戦うことで共同体意識を維持したが、江戸の平和な時代になると藩を流域単位に配置したこともあり、千筋に流れていた川を堤防の中に押し込め、堤外地に田圃や畑を作り、洪水を共通の敵とすることで、共同体意識を維持するようにした。さらに堤防の上でお祭りをしたり、遊郭を配置をしたりして、堤防を強化しながら田圃や

畑を守り富の蓄積を計ってきたとの事。

昔の農作業の写真を見せていただきながら、近代の効率性：都市集中・大量生産・スピードを追ったことで自然環境の破壊が進んで、地域の多様性が失われ、林業・農業・漁業が衰退して、国土の荒廃が進んできたことをあげ、ポスト近代の中で日本列島から離れられない産業を大事にしながら分散型で多様性に富んだ自然豊かな国土を作り上げつつ、新しい流域産業を育てていくべきで、その時の共同体意識は、思い出の共有であり、それが地域のアイデンティティを育てるとのこと。

目から鱗の事例紹介も多く、今後の活動に多くのヒントを頂いた。

4、活動報告

今回の大会は、基調講演で川に関する今後の大きな流れを提示してもらって、次の活動報告、それを受けてのパネルディスカッション、翌日の分科会までを4つの分科会のテーマに沿って段々と深めていき、参加者が何らかの具体的な行動のきっかけを得るような会にしたいと思っていた。

それで、地元(九州内)からは4つのテーマに沿った活動を選んで発表してもらい、全国からの3団体の発表でさらにそれに幅を持たせてもらうことにした。

「川遊びのススメ」では21年間続いている五ヶ瀬川での「リバーフェスタのべおか」。この発表にはキャラクターとなっているカップも登場して、このイベントの目玉である段ボールで作る「DANボートレース」などについて発表。さらに東京の大田区立嶺町小学校が多摩川での川遊びについて発表。

「川の文化と継承」では、延岡工業高校土木科の生徒による「なんば引き」という木杭による川工事の伝承について。これは「川よけ」と呼ばれ住民が公共工事をしてたころの川の根固め工事のやり方である。はつらつとした高校生の発表は素晴らしかった。青森

県の小川原湖自然学校では地域に伝承される様々な漁法による漁業体験について発表。

「川とまちづくり」は天下一五ヶ瀬かわまち創ろう会。よい子は川で遊ばないの 30 年により、よい子の親も川で遊んだ事が無いので「お父さん、お母さんのための川あそび村」について発表。

「川と防災」では NPO 法人白川流域リバーネットによる、国土交通省とも連携して取り組んでいる水防災水難防災プロジェクトについて発表。昨年の開催地新潟県見附市からは市内の小中学校での「防災キャンプ」を RAC との協力によって開催している事などを発表。

5、パネルディスカッション

パネリストは、NPO 法人長良川環境レンジャー協会理事の名和あけみさん、国土交通省河川環境課河川環境評価分析官の三橋さゆりさん、NPO 法人大淀川流域ネットワーク代表理事の杉尾哲先生、首藤正治延岡市長の 4 名に竹村さんがアドバイザーで、私がコーディネーターを務めた。

名和さんは学校と連携した水辺活動を実践しておられるが、学校との連携を強めたのは川での遠足の相談がきっかけで、打合せや 4 回はする下見から先生達の信頼を勝ち得たことで、環境教育や安全教育につながっていったという。

三橋さんは、水難事故はライフジャケットを着ていれば防げることが多いのでライフジャケットがもっと手に入れやすい環境を作ろうとしたことや、武州ガスさんにスポンサーをしてもらって入間川での体験プロジェクトを継続できるようにしたお話など興味深かった。

杉尾先生は、自らが開発した手法で、宮崎県内で開催している五感による水辺の調査の積み重ねの中から、川と結びつく物が子どもにすり込まれているということ、活動を持続していくためには行動力のある人材をいかに見つけ火を付けていくかが大事と話され

た。

延岡市長はあらためて延岡が持つ川文化を見直すと同時に、川での危険性を減らし川に親しめる環境を作るかということと川の神話伝説を活かしたまちづくりの可能性、延岡が作り上げた建設業者も加わってのボランティア防災ネットワークについて話された。

竹村さんから色々なアドバイスを頂いたが、日本の昭和 30 ～ 40 年代の技術で途上国を救うことが出来ると言う話に、工業高校生が取り組んでいる、木や石と人力で出来る河川整備が途上国を救うことに繋がると素晴らしいと思った。

6、交流会

交流会は、地元のホテルで開催したが、料理については延岡市の商工観光部長と農林水産部長に大変お世話になった。焼酎淬で養殖している「ほろ酔いカンパチ」を市長からのお振る舞いにする手配をしていたり、延岡捕れの魚のメニュー開発に力を入れている水産部長は、港まで出向いて、鰯や鰯の買い付けまでしてくれた。部長のススメにより地元の食材だけで出来上がったメニューは、参加者にとっても好評だった。赤身の美味しい EMO 牛のサーロインステーキも 10kg 提供いただきこれもとても美味しかった。アトラクションでは日向の「ひよっとこ踊り」のチームが参加してくれ、恒例のじゃんけん大会には、クリアウォーターカヤックスさんがカヌーを 1 艇含むアウトドア用品や観光協会などから、景品をたくさん出していただいて盛り上がった。

7、分科会

それぞれの分科会では、まず話題提供者の発表を基に議論を進める。コーディネーターにベテランが揃っていたこともあり、それぞれ具体的な問題提起やキーワードが出てきた。一例としては、子どもの発達段階に応じた川のプロプログラム作りや、五ヶ瀬川上流でも困っている鹿などの獣害による川の荒廃、自助・共

助・公助の前に近助、プロ技の活用、先生の卵の自然体験塾など、初めて参加する地元市民や行政、小・中学校の校長先生なども熱心に議論に加わり、喜んで頂いた。

8、全体会

RAC の平山さんの進行で、それぞれの分科会 2 のコーディネーターが発表を行ったが、分かりやすく新しいキーワードも出て、充実した分科会だったことが伺われた。

9、エクスカーショ

今回は、五ヶ瀬川 E ボート体験、清流北川鮎のチョン掛け体験、五ヶ瀬川河川文化施設見学の 3 つのエクスカーションを用意し、どれも好評で、五ヶ瀬川の恵みと文化を堪能していただいた。

翌日は、高千穂を巡るエクスカーションもあり、20 名ほどの参加者で、定番の高千穂峡、高千穂神社だけでなく、進み始めている神代川を中心にした「八百万の川まちづくり」に関係する天の真井、くし觸神社、流出した田圃をそのままに改修した山附川などの見学をした。

10、おわりに

今回の全国大会では、多くの方々に応援いただき、行政からも沢山参加頂いた。参加した様々な人からおもしろかった、川の可能性を沢山知ることができたなど、嬉しい感想を頂いた。

川まちづくりがスタートし、念願の高速道路がやっと繋がってこれからのまちづくりにどう活かすか考え始めているこのタイミングで、大会を誘致できた事は、幸せだったと思う。発表者にもさまざまな関係者が関わってくれ事で、川に関する幅広い議論が出来たと思う。市長も、総合的な流域治水を目指して市民が住みたいまちをすることに公費を入れられるようにしたいなどと発言してくれて、参加した市民にも多くの可能性を示唆する事が出来た。

流域単位の国土管理が求められている今、農林漁業や土木産業も含めて川との関わりと新たな産業を作って行くことが、誇りある地域創生に繋がって行くと思っている。

今回の大会を運営することで成長著しかった若き運営委員会のメンバーや協力いただいた沢山の皆様に感謝しつつ、この正式の報告書は、追って RAC のホームページに載る予定なので、多くの方には是非読んで頂きたいと思っている。

実行委員会／運営委員会／事務局／運営スタッフ

実行委員会	氏名	団体名	役職
委員長	土井 裕子	NPO法人 五ヶ瀬川流域ネットワーク	理事長
副委員長	杉尾 哲	NPO法人 大淀川流域ネットワーク	代表理事
副委員長	藤吉 洋一郎	NPO法人 川に学ぶ体験活動協議会	代表理事
委員	金子 好雄	NPO法人 白川流域リバーネットワーク	代表理事
委員	梶井 恵子	ガールスカウト延岡地区協議会	顧問
委員	高橋 勝栄	NPO法人 ひむか感動体験ワールド	理事長
委員	杉田 英治	NPO法人 五ヶ瀬自然学校	理事長
委員	秋實 範浩	NPO法人 リバーシブル日向	理事長
委員	宮地 元	NPO法人 川に学ぶ体験活動協議会	理事
委員	平山 康弘	NPO法人 川に学ぶ体験活動協議会	理事
委員	斎藤 隆	NPO法人 川に学ぶ体験活動協議会	事務局長
委員	楠本 敦	国土交通省九州地方整備局延岡河川国道事務所	所長
委員	永田 宣行	宮崎県延岡土木事務所	所長
委員	大谷 睦彦	宮崎県県土整備部河川課	課長
委員	中村 慎二	延岡市企画部	部長

事務局	氏名	団体名
	大井 里美	NPO法人 川に学ぶ体験活動協議会
	中村 浩子	NPO法人 五ヶ瀬川流域ネットワーク
	山田 大志	NPO法人 五ヶ瀬川流域ネットワーク

運営委員会	氏名	団体名	役職
委員長	成崎 聡	NPO法人 ひむか感動体験ワールド	事務局長
委員	原田 秀夫	TERRA子野アドベンチャー	代表
委員	田中 清也	NPO法人 みずのとらベル隊	理事長
委員	三井 寿展	Plying Factory Mitsui	代表
委員	國友 弾	リバーフェスタのべおか実行委員会	前実行委員長
委員	寺田 陽介	リバーフェスタのべおか実行委員会	実行委員長
委員	芥 充枝	のべおか未来の会	会員
委員	税田 憲司	NPO法人 五ヶ瀬自然学校	職員
委員	古本 哲也	NPO法人 五ヶ瀬川流域ネットワーク	会員代表
委員	小野 富生	国土交通省九州地方整備局延岡河川国道事務所	第一調査課長
委員	吉田 久康	国土交通省九州地方整備局延岡河川国道事務所	河川管理課長
委員	山中 康二	宮崎県延岡土木事務所用地課管理担当	副主幹
委員	工藤 研二	延岡市企画部企画課	係長
委員	黒木 幸喜	延岡市都市建設部土木課	主幹
委員	染矢 博文	延岡市教育委員会社会教育課	主任主事

運営スタッフ
甲斐隆宏 荒武宗人 田上幸喜 黒岩陽地 林慎之 塚本太一 切幸敏 長友明人 黒木克明 園田琢馬
西江和典 児玉祐季 黒木裕美子 梶野哲哉 川畠達裕 西ノ村哲秀 竹松由貴 甲斐正輝 高橋泰成
甲斐章悟 下本祐二 下田謙次郎 佐藤光春 松山義秋 上杉憲広 小野正勝 馬場啓悟 小田貴裕
竹内一博 夏田浩国 早田征弘 川越康平 請関俳人 廣瀬哲也 山下吉弘 大石剛平 柳田憲弘
八木千穂子 古本政子 河野裕子 佐藤福代 山口信子 黒木節子 内田理佐 大杉千弘 岩切昌一
田口艶子 小田純子 榮そのみ 春園四朗 柴田勉 クロード・ア・プーラン 仙石俊平 田中翔 谷井徳子
橋昌憲 廣川泉 中川麻衣 今泉茜 税田裕子

協賛者 一覧

一般社団法人 延岡観光協会	株式会社日中商事
株式会社クリアウォーター	リフォームセンター UEDA
有限会社有田牧畜産業	株式会社大久保商店
延岡地区建設業協会	太陽工業株式会社
延岡地区建設事業協同組合	西南電気株式会社
旭化成株式会社	田村雅弘事務所
株式会社有田生コンクリート	岸上蒲鉾株式会社
ブティック アルフィー	岡田工業株式会社
のべおか未来の会	株式会社ひむか造園土木
佐藤焼酎製造場株式会社	くいもんや ども安
五ヶ瀬ワイナリー	ホテルメリージュ延岡
清本鐵工株式会社	宮崎太陽銀行
株式会社山崎産業	宮崎ひでじビール株式会社
日新興業株式会社	高千穂酒造株式会社
上田工業株式会社	千徳酒造株式会社
八作建設株式会社	デザインパーク
株式会社盛武組	明巧堂印刷株式会社
株式会社綾建設	スナック 来夢来人
株式会社伊東建設	Playing Factory Mitsui
株式会社坂下組	有限会社延岡観光
DELICAFE LIFE・日々喜	株式会社久米建設
吉玉精鍍株式会社	森の食拓 ぐりゅ〜ん
有限会社南電工	喫茶&軽食 Audrey
コーラル企画	有限会社内倉写真館
中摩商事株式会社	有限会社渡辺酒店
有限会社かたかべ電気	ヘアースタジオ フィロス
県北生コン協同組合	ブティック チムニー
斉藤歯科医院	
株式会社第一テクノコンサルタンツ	
お仏壇のきむら	
草野喜代治税理士事務所	
夕刊デイリー新聞社	
成合一弘法律事務所	
有限会社末永家具	
増井歯科医院	
太田歯科医院	